

研修受講生6万人達成記念号

JS研修 みずのわ

vol.46
2012



機関誌「みずのわ」第46号 記念号

平成24年発行 第46号

発行 地方共同法人 日本下水道事業団 研修センター
〒335-0037 埼玉県戸田市下笹目5141
TEL. 048-421-2692
FAX. 048-422-3326

印刷 株式会社 石井印刷

地方共同法人 **日本下水道事業団 研修センター**

も く じ

みずのわ 46号

◆ 巻 頭 言

・研修生6万人達成記念	日本下水道事業団 理事長	谷戸 善彦	1
	研修センター所長	藤生 和也	2

◆ 研修生6万人達成記念寄稿

研修講師 OB	谷口 尚弘	昭和49～51年度助教授	3	
	畑田 晋	昭和57～59年度教授	4	
	中村 益美	平成4～6年度教授	5	
	酒井 勝利	平成7～9年度教授	6	
	岩佐 行利	平成11～12年度教授	7	
	大浪 涉	平成14～15年度教授	8	
研修受講生 OB/OG	村上 孝雄	昭和50年度受講	9	日本下水道事業団
	高橋 澄夫	昭和55年度受講	10	千葉県千葉市
	杉岡 敏雄	昭和58年度受講	11	(元)福岡県
	山田 敏彦	昭和59年度受講	12	愛知県尾張旭市
	後藤 栄仁	平成1年度受講	13	山梨県下水道公社
	相浦 要	平成7年度受講	14	岐阜県瑞穂市
	梅津 仁	平成8年度受講	15	福島県下水道公社
	島崎 昭生	平成9年度受講	16	埼玉県新座市
	吉和 弘道	平成18年度受講	17	岡山県倉敷市
	高嶋 由久子	平成20年度受講	18	愛媛県内子町
	横田 節子	平成21年度受講	19	岡山県浅口市
	神崎 陽介	平成22年度受講	20	熊本県熊本市
	菅谷 卓司	平成22年度受講	21	千葉県佐倉市
	清水 美幸	平成22年度受講	22	熊本県荒尾市
	齊藤 裕子	平成23年度受講	23	北海道北見市
	今井 博美	平成23年度受講	24	神奈川県厚木市
古山 裕二	平成23年度受講	25	島根県出雲市	
同窓会 ニュース	さいと会 安彦 四郎	昭和59～61年度助教授	26	
	宮山会 志田 孝仁	昭和57年度受講	27	山形県

◆ 研修センターのあゆみ (写真 共)	28
---------------------	----

◆ 研修センター歴代幹部職員・教員 (昭和47年～平成24年)	30
---------------------------------	----

◆ 平成24年度研修実施計画 (下半期のご案内)	32
--------------------------	----

◆ 編集後記	33
--------	----

『みずのわ』の名前の由来・・・

滑らかな水面に落とした一滴のしずくがつくる小さな輪が大きく広がる様から、研修生の輪が一人から全国へ、一都市から全国の都市へと大きなつながりが生まれるように、との期待を託したものです。

巻頭言

研修生6万人達成にあたって

日本下水道事業団理事長

谷 戸 善 彦



日本下水道事業団（JWS）は、平成24年11月1日、創立40周年を迎えました。昭和47年11月1日に、「下水道事業センター」として発足し、昭和50年の認可法人・日本下水道事業団を経て、平成15年に地方共同法人・日本下水道事業団となり、今日に至っています。この40周年と同じ年に、JWSの研修生累計6万人を達成致しました。これは、ひとえに、歴代の研修生、派遣団体の方々、講師の方々、研修業務の関係者等、多くの皆様のご支援、ご尽力の賜物と、心から感謝申し上げます。

JWSは、下水道インフラの根幹的施設（処理場・ポンプ場・幹線管路等）の計画・設計・施

工・管理、下水道インフラの技術開発・実用化、下水道事業の経営支援・技術援助、下水道技術者の研修・育成等、幅広く、「下水道事業のライフサイクル

全体にわたっての地方公共団体の方々のサポート」を行っています。私は、昨年11月に理事長に就任して以降、全国を回り、

多くの地方公共団体の方々とお会いしてきました。そのなかで、上で述べた多くのJWSの業務（セグメント）のうち、研修業務に対する評価が、最も高いのではないかと印象を持ちました。全国、津々浦々、どこに行っても、「私もかつてJWSの研修を受講しました。戸田が大変懐かしいです。」「いまでも、JWS

研修時のメンバーで年一回、同窓会をやっています。」「お世話になった〇〇先生は、お元気でしうか。」という話ができるのが、一度や二度ではありません。先日、JWS発行の「季刊水すまし」の40周年特集号で、JWS評議員会の会長である三村

申吾青森県知事と対談をしました際にも、三村知事から、「わが青森県では、県下累計で、この40年間に、JWSの研修に1093人お世話になりました。」との発言をいただき、この話題がでたことに驚くとともに大変うれしく感じました。これだけ、

JWSの研修効果が、全国に広がっているということだと思います。私自身は、JWSの研修を直接受講したことはありませんが、

研修の教科書には、大変お世話になったことがあります。今から30年前に技術士の試験を受けるべく、集中的に勉強したとき、大いに活用させていただきました。当時はまだ、技術士の受験用の参考書が少なく、JWSの研修を受講した友人・先輩からJWS研修の教科書を借りて、勉強しました。どのJWS研修の教科書も的確にポイントがまとまっております。驚いたのを覚えています。まちがいない、当時、最高の「下水道技術の参考書」だったと思います。いまでも、素晴

らしい教科書だと思っています。昭和48年2月にJWS研修がスタートしましたが、その折、草創期の講師陣の方々がいろんな資料を読み解き、自らで執筆されたのだと思います。いかに努力して最初の教科書を作り上げられたか、心から敬意を表する次第です。

JWSの研修は、①座学だけでなく、実習やディスカッションに力を入れたカリキュラムになっており、研修効果がすぐ実務に繋がる、②研修生同士の交流を通じ、お互いのポテンシャルを高めあうとともに、研修仲間及び講師陣とのネットワークを通じて研修終了後も情報交換・問題解決に資することができます、③という他の研修にはない素晴らしい特徴・効果があります。こうしたことが、講師陣の努力ともあいまって、全国どこで聞いても、JWSの研修の評価が高いということに繋がっているのだと思います。

事業推進の根幹である「人づ

くり」を専門の実践的体制で担うJWSの下水道研修業務は、地方共同法人たるJWSの役割の最たるものであると考えています。今後とも、魅力ある研修メニューへの再編や地方研修の拡大といった改善・改革等に努力を重ねてまいります。JWS研修のさらなる活用等、皆様方のご支援・ご指導方、どうぞよろしくお願ひ致します。



巻頭言

— 乗る舟人は変っても —

研修センター所長

藤 生 和 也



本年4月、J S研修の累計研修生数が6万人を超えました。J S研修はJ S創立と同時に昭和47年（1972年）から開始され、今般、創立40周年と同じくして記念すべき年を迎えました。地方公共団体の皆様を始め、関係の皆様のご支援に深く感謝申し上げます。

さて、昭和47年（1972年）というと、沖繩が本土復帰し、日本とモンゴルが外交関係を樹立し、日中の国交が正常化した年であり、私は下水道技術など何も知らない中学生でした。全国下水道普及率は当時わずか17%であったところ、平成23年度末、75.8%に達しており、長い時間の流れを感じさせられます。こ

の間、研修が連続と続けられ、修了生が粛々と下水道建設に尽された結果であると思えば、さらに感慨を覚えます。

研修センターの敷地内にはいくつかの記念植樹があります。創立10周年、20周年、30周年、研修生3万人達成、4万人達成、5万人達成のものが確認できます。また、気づいたところでは、職員が寄贈したという泰山木があり、6月に大きな花を咲かせます。今般、記念植樹を予定していますが、敷地内は建物や道路・駐車場に多くを占められ、人目に触れる好適地がありませんでした。そこで調べたところ、本館玄関北側の植樹帯に、いつ、何の記念でか不明ですが、植樹されたヒマラヤ杉が枯れていることが判明しましたので、これに替えてシダレ桜を植樹することとなりました。銘を刻んだ石柱も設置されますので、開花時（おそらく4月初中旬頃）にご来所の際は、暫しお立ち寄りいただき、ご観賞ください。

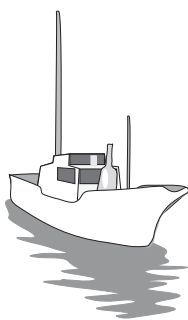
ところで、研修内容は時代の要請に依り常に見直しています。が、変わるものと変わらないものがあります。例えば経営、地震対策、改築更新の人口が高まる一方、末端管渠整備のニーズからか、ベーシックな管渠設計も根強い人気です。変わるもの、変らないものを見分ける目を養い、今後も研修品質の維持向上に努めてまいります。

研修生が次々と入れ替わるのと同様、職員も多くは二、三年で転勤となります。しかし、中には長くここに勤める方もいて、先頃、12年勤務した方が定年退職となり、名残りを惜しんだところでした。また、かつて非常に厳しい寮監の方が居て、門限に遅れて締め出された研修生が壁をよじ登って窓から帰還したなどという逸話も伝え聞きます。

数年後の開花時はこんな様子（？）

星霜移り、人は去り、乗る舟人は変わっても、国民福祉のため下水道事業が進む限り、私も研修センターはしっかりと下水道事業に携わる皆様のお役に立てるよう全力を尽くしてまいります。近年、国及び地方公共団体からJ S研修への補助金が激減しているため、経営は極めて厳しい状

況にあります。皆様には、どうか今後とも研修生及び講師の派遣でJ S研修をご支援くださいますようお願い申し上げます。



研修生6万人達成記念寄稿

研修講師OB

「下水道界の宝

〜素晴らしい講師・研修生〜

（株）東京設計事務所顧問

谷口尚弘

（元）東京都下水道局建設部長



昭和40年代後期は第3次下水道整備5カ年計画（事業費26,000億円）がそろそろ終了し、第4次の準備に入ろうとしていた頃です。第4次の事業費は75,000億円と3倍増、今では信じられない伸び率です。しかし、その一方でこれだけの予算を執行できる体制は十分かが問われておりました。

そこで国は昭和47年に「下水道事業センター」を立ち上げ、その目玉のひとつとして地方公

でした。しかし、研修の実施に猶予はなく、午前中に1コースが終了すると午後には次のコースが始まるという綱渡りが続きました。

「息つく暇もないですね！」と思わず弱音を吐いたら「息しているだけでもありがたいと思え！」と菊池先生に一喝されたことを思い出します。

カリキュラムができると、次の課題はテキスト作りと講師の確保です。特に講師は公共団体で知識・経験のある方々にお願いたしますが、本来業務を抱えた方々ですので、こちらの都合どおりにはゆきません。しかし、私は東京都から派遣されましたが、派遣元の直属上司であった高橋久課長が積極的に支えてくださいました。非常に部下の面倒見の良い方で、「困ったときにはいつでも来い。お前を立ち往生させることは絶対にしない！」とあって、実際自らも講師で何度か戸田に来ていただきました。

また、思い出深いこととして、当時国により流総計画が導入されることになったため、「流総コース」が開設されました。これには本省からも久保尨下水道部長や高秀秀信初代流域下水道課長（後に横浜市長）、土木研究所

の村上健室長等錚々たる方々が自ら講義されるなど、その熱の入れようは尋常ではありませんでした。とにかくこの時代、日本の下水道界には熱気がありました。

一方、私の3年間の在任中に来られた研修生の方々は優秀な方々が多かったことも印象深いことです。公共団体側もエース級の職員を送ってきたからお付き合いくださった研修生から政令市の局長、県の課長、市町村の部課長、さらには副市長となつて立派なリーダーになられた方々が続出したことがそのことを物語っております。私は東京都退職後、日本下水道協会に奉職しましたが、このときに多くの研修生OBの方々と再会し、皆様が本当に立派な働きをされており、日本の下水道の軸となつておられることを認識いたしました。同時に研修部に在籍したことへの幸運を心から感謝した次第です。

JS研修センターが発足40周年となり、6万人もの研修生を送りだされたとのこと、大変心強く思うと同時にその果たした役割の大きさを改めて感じます。今後も次代の下水道事業を担う人材が巣立っていかれるよ

う祈念いたします。

（元）研修部助教授

昭和49年〜51年度



「研修雑感」

畑 田 晋

(元 東京都下水道局課長)



研修修了六万人達成おめでとうございます。一言では言い尽くせないほどの数字です。

私の在職の昭和五十八年八月に一人突破のセレモニーがありました。あれから三十年、成長と発展を重ね、ついに今日を迎えたという事は、この事業に携わる多くの人々の理解と協力の賜物と思います。これだけ多くの人が全国津々浦々で「みずのわ」のように広がり、下水道事業を支えていると思うと、研修部の存在感、重要性、責任感を感じます。

私は、昭和五十七年八月から六十年三月まで研修部にお世話になりました。東京都下水道局

からの転勤は全く初めての仕事で、人に教えるだけの知識と経験があるのかと不安の中でのスタートでしたが、皆様のご協力を得て有意義な三年間を過ごさせていただきました。

今となつては貴重な経験、たつたと思います。住まいが横浜の南端の戸塚で、バス、電車乗り継いで片道二時間かかりました。

単身赴任も考えましたが、当時福井市から来ておられた小沢先生がご自身の体験で「出来るだけ通勤の方が良いですよ」と真剣にアドバイスを頂き、往復四時間通い続けました。仕事柄遅刻は絶対に許されないので、三十分前に着くのを念頭に置きました。外部講師、研修生との懇親会の翌朝は大変だったこと 생각이出されます。

当時研修部は、年間千二百人体制でした。

計画設計、実施設計、工事監督管理コースを主に担当しまし

た。その中で年間六〜八コースをコースリーダーとして三〜四週間、入所から修了までお世話しました。研修生名簿を約一か月前に受け取り、彼らの出身地等を地図にプロットしたり、研修運用に最も重要な幹事、副幹事を決定したり、研修のカリキュラム作成等の苦労も今となつては楽しい思い出です。特に施設見学は将来の参考となるよう、また研修の思い出になるよう道中に観光名所に立ち寄る配慮もしたつもりです。

最も苦労したことは、三十人前後の研修生の顔と名前を覚えることでした。出来るだけ早く三日を目途に努力しました。始業式後に各部屋毎に四人一組で写真を撮り、それをすぐ写真帳に貼り、長い通勤時間の中で繰り返し覚えたものです。名前で研修生を呼ぶことでお互いに親近感を抱くものです。

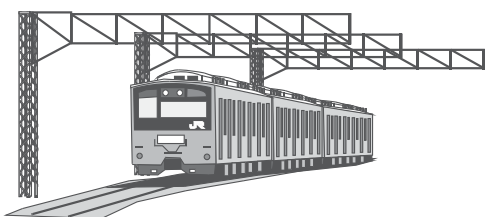
都庁を退職後コンサルタントにお世話になり全国を歩きましたが、研修生に会えるのが楽しみで昔話に話が弾みました。「私もいつ、誰のコースでお世話になりました。」とあちこちと輪が広がり改めて研修部の力を実感しました。

今後共研修センターと研修修

了者の益々の発展を祈念します。送付された「みずのわ」の写真の中で当時お世話になった渡邊さん、仲村さん、太田さん、全然変わりませぬね。ご健闘をお祈りします。

(元研修部教授)

昭和57年〜59年度



JS研修部勤務のころ

首都圏新都市鉄道株式会社常務取締役

中村 益美

(元 東京都下水道局技監)



研修修了生6万人達成、誠に
おめでとうございます。

自治体の要請に応じて研修生
を受け入れ、順調に実績を積み
上げて今日を迎えられた関係の
皆様の日ごろの努力に敬意を表
する次第です。

私が研修部に勤務したのは今か
ら20年前、平成4年4月から平
成7年3月までの3年間でした。

全国的に下水道の整備が進め
られ、研修修了生も2万人を超
えて増加する中で、いかにして
研修生の受け入れを増やすかが
課題となっていました。コース
の回数の検討、カリキュラムや
出前授業の検討など、毎日が慌
ただしかった記憶があります。

また、在籍した後半は自治体
の財政状況に翳りがみえはじめ
、新研修棟の建設もはじまる中で
、このまま研修生数を確保し続け
ていけるのかという一抹の不安
もありました。今にして思えば
、杞憂ではありましたが、研修部
の皆様の努力のほどがしのげら
れます。

ところで、拙宅の自室に古い
書類整理箱があります。

厳しい家人の断捨離を逃れた
この箱の中には、新聞の切り抜
きやパンフレットとともに、研
修部時代の授業中や測量実習中
の写真、そして家人にどれも同
じと言われた数十枚の集合写真
が入っています。

まさに開校式を終えたばかり
の研修生の皆さんの、名前が照
合できる集合写真で、私にとつ
ては研修部勤務のころの思い出
の詰まった写真です。

研修をコーディネートする側、
苦手なしゃべる側に立つことの
戸惑いと役割の重さを感じなが

らも、少しでもお役に立たなけ
ればとの意を強くした憶えがあ
ります。

講義では、自分の経験を交え、
解りやすく伝えることを心がけ
て準備をしましたが、残念なが
ら教室の午睡を止めるには至り
ませんでした。

伝えようとする熱が不足して
いたかなという反省は、その後
の仕事でも生かすような心がけて
います。考えてみれば研修部で
の3年間は、自分にとっての研
修期間であつたかなという気が
しています。

一方、開講・修了時をはじめ
現場見学や体育のあとの懇親会
など、時間外の研修生との交流
の機会も多く、郷土の話題で話
がはずみ、時を忘れて聞き入っ
てしまうこともしばしばでした。

また、都市からの出向者の多
かつた研修部の中も多士済々、
オープンで和気あいあいとして
いました。下水道駅伝への参加
や職場旅行、釣り、ゴルフそし
て折々に開催された水質実験室
でのミニ懇親会の楽しさは今で
も懐かしく思い出されます。

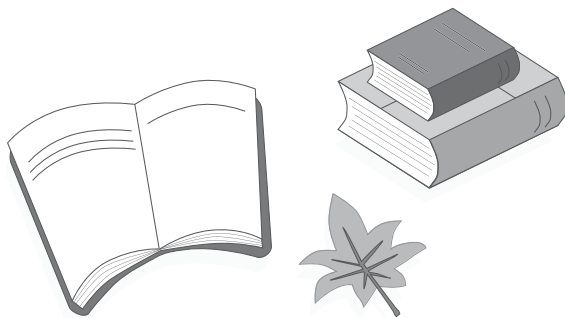
とりとめの無い話になりました
が、事業団研修センターには
下水道にかかわる技術や知識な
ど実務を伝えるとともに、情報

のネットワーク構築の場として、
大いなる役割を果たし続けてい
ただきたいと思えます。

結びに研修センターの益々の
発展とみずのわの更なる広がり
に期待申し上げお祝いの言葉と
いたします。

(元研修部教授

平成4年～6年度



懐かしい思い出

日本SPR工法協会技術部長

酒井 勝利

(元 東京都下水道局長)

J S 発足40周年、並びに研修生累計6万人達成、おめでとうございます。全国の下水道事業の一翼を担うJ S 研修センターの偉業に心から祝意を申し上げます。また、このような偉業達成に片時ではありましたが、携われたことに感謝を申し上げます。と思います。

私が戸田の研修部に在籍していましたのは平成7年4月〜10年7月までの3年間で、全国の下水道普及率も58%に達し、少しずつ下水道技術者の養成が下火になりかけていた時代でした。その中で「年間研修受講者2000人確保」の目標を掲げ、既存コースの見直しや新規コースの開設などで、常に魅力ある研修を提供しようと竹下和夫部長を先頭に、職員一同が心を一つにして研修業務に励んだ懐かしい時代でした。新規コースの募集案内を全国3000市町村に郵送するため、全職員が昼休みを利用して袋詰め作業をし、

郵便局に持ち込んだ記憶もあります。そんなことが縁で当時の在籍者が、毎年、忘年会で旧交を温めています。研修部在任中も含め17年間休まず忘年会が催されているのも、東京都出身の鮫島和夫さんの努力に寄るところと、懐かしい思い出を共有する善きメンバーに恵まれているからでしょう。殆どのメンバーが現役を退き第二の職場で活躍されていますが、大阪市の佐崎俊治さん、松本広司さん、東京都の田村正明さん、J S の弓削田克美さんがバリバリの現役です。退職組は下水道界に関係する職場が多く、埼玉県岩井章さん、

横浜市の大村昇さん、広瀬久雄さん、中村英治さん、町田崇さん、東京都の小松原修義さん、佐藤一則さん、いろいろな場面で顔を合わせる機会も多く情報交換もしています。円滑な研修業務を支えた女性陣の仲村さん、川口さん、仲神さん、大

型バイクで颯爽と通勤していた間庭さんは、今ではJ S 本社で活躍中です。

横浜市出身の扇原博さんは、下水道新技術推進機構で新技術の審査を担当され、私の所属する更生工法協会も、お世話になっています。退職後に文学の道を目指した東京都出身の萩原昇さんは、大学での勉強の成果を本にされるなど勉学に余念がありません。

当時の研修生活を振り返ってみると、20日間にも及ぶ長期研修で寝食を共にする研修生には、一種独特の共同意識が芽生え勉強も余暇の遊びもグループでの行動が目立ちました。ハードな研修が一区切りする週末には、三々五々グループで出かける姿をよく見かけました。近場の息抜き場として研修部からバスで通える「西川口」には、多くの飲食店があり、研修の疲れを発散する格好の場所でした。

ある週末に、二人の研修生が門限までに帰って来なく、外泊の届もしていないので、事故でもあったのかと心配した事件がありました。本人たちは26歳で急死した尾崎豊の墓参りに行き、埼玉県所沢市で道に迷い深夜に寮に帰って来たとのことでした。

若者の共感と呼んだ尾崎 豊が歌った「I Love You」が懐かしく思い出されます。あれから20年近くの歳月が流れ、当時の若い研修生の皆様も、責任ある立場で御苦労されていることと推察します。皆様の地元でもやがて本格的な改築事業に取組む時期が巡って来ます。改築事業を円滑に実施する体制を整えるために、その昔、皆様自身が体験した事業団研修が、後輩教育に有効であることを思い出して下さい。

(元研修部教授
平成7年〜9年度)



左から2番目筆者



ますます重要性が増す

下水道技術の伝承

東京都下水道サービス(株)
技術開発担当部長

岩 佐 行 利

(元 東京都下水道局課長)



J S 発足40周年を迎え、研修生累計6万人を達成できましたことに心よりお慶びを申し上げますとともに、これまで携わってこられた関係者の方々に改めて敬意を申し上げます。

私は平成11年から2年間、研修センター(当時は研修部)の実施設計の担当教授として携わらせていただき、早いもので、それから12年経過してしまいました。10年ひと昔といいますが、社会経済状況はもろんのこと、私自身の環境も大きく変わってしまいました。

東京都下水道局から出向した私は、大きな期待と若干の不安を抱えて、戸田に赴任したことに

を今でも鮮やかに思い出します。

幅広い年齢層と様々な経歴を持った全国の自治体職員の方々と研修生として迎え、数週間共に過ごしたことは、それまで携わった業務内容とは大きく異なり、若干の戸惑いも覚えながらも、楽しくかつ責任のある業務でした。特に、大人とは言え、生活環境の違う場での研修であり、病気や事件・事故にあわずに修了することができるよう祈りにちかい思いで携わっていました。

5年ほど前になりますが、「研修生5万人達成」時にも、「研修みずのわ」の原稿依頼をいただきました。その時にも述べたのですが、当時の研修生から現在も近況を綴った年賀状をいただいております、2年という短期間であったにもかかわらず、当時の研修生や講師の方々とのきずなが現在も続いていることに感謝いっばいですし、ありがたいことです。

当時、地方では下水道整備に

拍車がかかっており、また大都市では高普及率の達成により、本格的な維持管理時代を向かえることから、下水道経営のあり方や老朽化した下水道施設の改築更新(再構築)にどのように対応するかなどの多様な課題に対しての検討が活発化してまいりました。研修部の中でもそれまでの基本的基礎的な講座に加え、これら時代に対応した研修テーマやカリキュラムの新設等について熱心に検討したことが強く思い出として残っています。その中のいくつかがいち早く試行的に取り組まれ、今日に至っていることは、評価されるのではないかと思います。

昨年の東日本大震災はもとよりこの10数年の間を見ても、新潟中越地震や各地での大水害などに見舞われ、下水道施設も大きな被害を受けました。これら被害を踏まえ、計画論としての下水道施設のあり方や、被災後(被害後)の復旧対応のあり方、更には老朽化した管渠の診断・更生技術、施設の耐震化などの新たな課題も明らかになりました。

下水道が普及すると、下水道事業者としては維持管理中心の組織体制となり、建設部門は縮

努めて参る所存です。

(元研修部教授)

平成11年〜12年度



研修生6万人達成に寄せて

公益社団法人日本下水道協会
関東地区事務所長

大 浪 渉

(元横浜市下水道局長)



まずはJ S四〇周年及び研修生累計6万人達成おめでとうございませう、昔のことなのですっかり忘れてしまっておりますが、まだら模様の記憶をたどり何とか書いてみました。

某年某月「J S出向を命ず」の内示をいただいた、講師などで戸田の研修部へは何回か足を運んでいたのでもそこまで通うのかと少し躊躇した。通勤ルートは、横須賀線、京浜東北線、埼京線、と乗り継いでシャトルバスに乗る、(当時は「湘南新宿ライン」なるものが出始めた)朝夕の時間帯は運行していなかった。ドアツウドアで約2時間半なんと往復で5時間これは難儀

すると覚悟した、しかし朝はとも早いでラッシュにはなっておらず電車は座れ、ゆつくり新聞を隅から隅まで読み、若干居眠りをして乗り過ごすことはありません。帰りは十分に読書の時間が取れそれなりに通勤時間を有効に使えました。

赴任早々は、後ろの方で「先生」と声がかかると、誰のことかと周りをきよきよろしていましたが、数ヶ月経つ内に条件反射で返事が出来るようになりました。私は計画設計コースの担当で年7回のコース担当と他のコースの何コマかの授業を受け持ちました、自分が担当のコース中は何が何でも休むわけにはいかず、ぎっくり腰の腰痛を押しして冷や汗をかきながら出勤したことがあり、まさに痛勤でした。

講師の依頼や現場見学の選定にあたり当時の建設省や自治体等をお願いして回りました。担当コースには施設見学のカリキュ

ラムも組み込まれており、バスを仕立てて、処理場視察は東京お台場の有明水再生センター、工事現場は横浜のシールドトンネル工事をよく見に行きました。(研修生に人気のお台場のフジテレビ周辺と横浜の中華街は場所選定の必須条件だった) 東京都及び横浜市の当時のご担当の方々にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。

研修生の宿泊施設は6人部屋が基本でプライバシーのない生活に何となくなじめない方やいびき対策のために耳栓持参の研修生もいました。中には夜間の時間つぶしに外出や娯楽室で過ごされる方もいましたが、多くの研修生は復習をしたり宿題を手分けして取り組むなど充実した研修期間を過ごしていたと思います。最終日の打ち上げでは、2週間の苦労と達成感から当初のよそよそしさとは打って変わって和気藹々と盛り上がりつつありました。

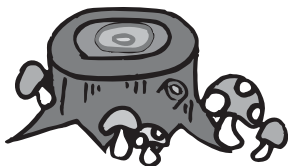
一方バブルの崩壊以降、地方公共団体は税収が低迷し財政状況が厳しくなり、研修費の削減を余儀なくされ、長期間に亘る研修に職員を送りだすことが徐々に難しくなってきた時期でもありました。当時の教授陣は東京

都をはじめ大阪市、横浜市、埼玉県からの出向者があり、研修生のアンケート結果を気にしながら競って講義の充実を図った、帰りには戸田公園駅付近方下の飲み屋に通ったことが懐かしく思い出されます。また、全国の下水道技術者等の育成の一翼を担えたことは私自身にとっても大変勉強になり有意義な2年間でありました。

6万人もの卒業生が全国津々浦々にいることは、下水道関係者にとつて力強い限りです、しかしその中には東日本大震災で被災された都市もあり複雑な心境です。心よりお見舞い申し上げます。心より早期の復興を望んでおります。厳しい時代ではありますが今後とも研修センターのご発展とご健闘をお祈りしてお祝いの言葉とさせていただきます。

(元研修部教授)

平成14年～15年度



研修生6万人達成記念寄稿

研修受講生

OOB /

研修の思い出

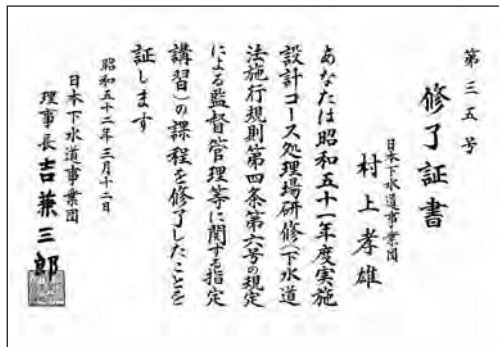
日本下水道事業団理事
(研修・国際担当)

村上孝雄



これらの研修の内でも、実施設計管きよIはJ Sに入社して初めて受講した研修で、印象に残っています。当時は、荒川の内堤と外堤に挟まれた何も無い場所に完成したばかりの6階建て研修本館がポツンと建っている

私は、昭和50年4月の日本下水道事業団（J S）に入社後、数年間で4回研修を受けました。受講した研修は、昭和50年度の実施設計コース管きよI専攻、昭和51年度の実施設計コース処理場専攻、昭和52年度の工事監督管理コース工事管理II専攻、昭和54年度には計画設計コース認可設計専攻です。写真は、昭和51年度に受講した実施設計コース処理場専攻の修了証書です。もう35年も前になります。



るという状況でした。本館が完成する前は、研修は仮設のプレハブで行っており、私が管きよI研修を受けた時は、寝泊りや講義は本館でしたが、一部教室や厚生施設はまたプレハブにあった記憶があります。

管きよI研修の実習は、教班に分かれて近くの町内の道路を測量して管きよの設計図面を作成し、更に数量を計算して工事費用を積算するというもので、これは現在の研修でも受け継がれています。私は測量が苦手だったので、同じ班に手馴れた人がいてテキパキと作業を進めてもらい助かりました。今では、自治体の担当職員が直接、測量や図面作成をすることは少ないと思いますが、このような基本的なところをまず自分でやってみるといことは、仕事の理解に大変に役立ちます。

当時は体育の時間もありました。本館の脇には広い空き地があり、体育の時間にはその空き地でソフトボールをやりました。汗を流した後は風呂ですが、当時の風呂は本館4階にあり、その外は広いテラスになっていました。風呂からテラスに出ると、荒川河川敷からの風が心地よかったです。堤防を散歩して

る人から苦情が来て、裸でテラスに出ないようにと注意された記憶があります。

風呂の後はプレハブ厚生棟でのコンパです。酒がまわると歌が出来ますが、当時はカラオケなど無く、皆の手拍子で出身地の民謡等を披露するといった素朴な宴会でした。さて、コンパの後でどこかに行こうということになると、まだ埼京線は無く、行く先は京浜東北線の西川口かありませんでした。西川口で時間を忘れて楽しく過ごしていると、研修寮の門限に間に合わない研修生も出てきますが、当時は、住み込みの厳しい管理人がおり、門限になると容赦無く入り口を施錠して、泣けど叫べど入れてくれないので、仕方なく、荒川の土手で夜を明かした研修生もいたそうです。（私ではありません。念のため）

当時の研修生仲間には、今でもまだ年賀状のやり取りをしている人もいます。J Sの研修は合宿制が基本ですが、これにより知識や技術の習得に加えて人脈が得られます。昨今、自治体の財政状況は厳しい状況ですが、合宿制の研修によって得られる有形無形の成果は、これからの下水道を担う若い技術者にとつ

てかけがえの無い財産となるものと確信しております。今後ともJ S研修をご活用頂ければ幸いです。

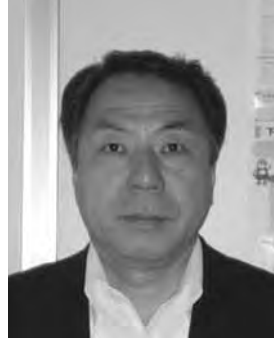
(昭50『管きよ設計I』

ほか受講)



研修生6万人達成に寄せて

千葉市建設局次長
高橋 澄夫



昭和48年研修事業の開始以来、研修生の累計が6万人を達成され、大変おめでとうございます。この間、研修にご尽力をされた関係者の皆様に敬意と感謝を申し上げます。

千葉市は、平成4年政令市移行後の積極的な下水道投資により、平成23年度末下水道処理人口普及率は97.2%となっております。現在、市の財政は非常に厳しい状況ですが、外部研修は職場内研修とともに人材育成のための重要な研修と位置づけ、事業団研修を最優先し、年間8名前後の職員を継続的に参加させております。これまでに、ほぼ全ての下水道技術職員が事

業団研修を経験し、本市の下水道事業の推進に大きく貢献しております。引き続き、下水道技術の維持・伝承、職員の技術・技能の向上、さらには、総合的な技術力と判断力を身につけ、創意工夫ができる人材育成のため、時代に即した研修内容で実績のある事業団研修を積極的に活用することとしております。

さて、私の研修センター経験は、入庁2年目で、今から32年前になる昭和55年度の管きよ（Ⅰ）コースです。研修生活は4人部屋の3週間程度の宿泊研修であり、当初は長期に亘る缶詰研修への不安もありましたが、入所初日から懇親会、ストレスが溜まるころにはソフトボールなどセンターの配慮や連日の研修生達との部屋や厚生棟などで、酒など酌み交わし、お互いに、懇親を深めたもので、楽しく日々を過ごすことができた記憶があります。

研修内容は、平板測量、水準

測量、そして製図、数量計算、最後に積算書作成などの実技と下水道法などの講座があり、下水道技術の「Ⅰ」から、系統的・実践的に教えていただき、充実した内容でした。研修では、まさかの残業もありましたが、無事研修成果品（設計図、積算書等）を完成させ、後日職場に郵送されました。

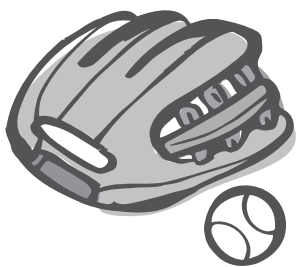
職場では、成果品をネタに、「これで十分だ。早速仕事を発注してもらおう」ということで、初めての仕事を担当することになり、直営による測量設計でしたので、研修成果が即仕事に反映されることになりました。現場ではトラブルもありましたが、先輩の指導を得て、設計変更を行い、無事仕事を完成することができた思い出があります。このことが「縁」かは、わかりませんが、34年目の下水道事業に携わっております。

なお、研修生を送る立場から見ると、研修生は、整備状況が異なる自治体職員が集まり、落ち着いた雰囲気の中で、仕事の課題、最新技術の情報共有など、研修生同士が議論し、時には、おらが町の誇りなども熱く語る中で、自ら育成され、研修から戻ると皆一回り大きく成長し

ていると常に感じております。研修生には、下水道事業の発展のため、引き続き、研修による技術の修得はもとより、研修を離れても、仕事の情報交換を行うなど研修生同士の仲間づくりを深め、お互いが切磋琢磨することを期待しております。

最後になりますが、研修センターの益々のご発展と関係者の皆様のご活躍をご祈念申し上げます。

（昭55『管きよ設計Ⅰ』受講）



遠い昔の思い出

（元）極東コンサルタント九州支社顧問

杉 岡 敏 雄

（元）福岡県道路公社道路部長



日本下水道事業団研修センターの渡邊准教授から電話があり、事業団40周年の記念「みずのわ」の原稿を突然依頼されました。頭に瞬間的に閃いたのが、「焼酎」「稲場教授」「4人部屋」「ピーナツ」「宿題」という5つのキーワードでした。

まずは、日本下水道事業団発足40周年と研修生が6万人を超えたことに對し、関係者の皆様にお喜び申しあげます。これもひとえに皆様のひとかたならぬ努力のたまものだと思います。さて、私が研修に参加したのは、福岡県流域事務所に入庁して2年目だったと記憶しております。昭和58年度計画設計コー

ス認可（第2回）38名の研修生とともに勉強にいそしみました。現場の建設事務所であるにも関わらず、「認可」にいかせてもいませんでした。建設工事を担当していたのですが、「認可」はどういうものか、まったくの素人でした。しかし、これは「現場今やっているから、計画を勉強して来い。」という、上司の思いやりだったと思います。

しかし、これが私の悲惨な研修の始まりでした。私は、言葉の意味すらわからず、暖かい教室で居眠りしながら、教授の講義を聴いておりました。稲場教授は講義中ときどき黒板を叩かれ、私たちの眠気を覚まそうとしておられたようです。また、途中アンケートのようなものがあり、こともあるうちに、「私は聞くだけではわからない。問題を解くとかあるといい。」と書いて出したところ、次の日、稲場教授は授業中に、問題を出され、私に答えを求められました。

た。私はなにも答えることはできませんでした。それは、宿題となりました。解けなかった問題は処理場の物質収支だったと思います。そのときばかりは、酒も飲まずに、部屋の皆と勉強したのを覚えていきます。

授業は9時30分から、3時間13時30分から、3時間の構成でおこなわれていました。夕食は6時からでした。授業がおわり、夕食までの間が長かったので、部屋に戻り、お湯と焼酎とピーナツをかたわらに置き、意見交換会を始めたものでした。

もちろん食事の後も夜遅くまで続きました。また、焼酎を飲む方は少なかつたような時代だったと思います。福岡は焼酎の産地の時代でしたし、つまみのピーナツは部屋の同室の方が持参されたものでした。

研修のはじめの一週間を長く感じたこと、ほんとにいつにならば帰れるのか・・・。二週間目になると慣れました。三週間目はとても、早く感じました。あつという間に研修終了でした。

58年度認可（第2回）講師一覧表

日	時	名 称	講 師	備 考
14	日	南 禮 式	稲場 紀久雄	日本下水道事業団研修センター
15	火	下水道計画設計概論	小 沢 淳 夫	同 上
		下水道法(附)施設概論	野 村 孝 浩	建設省下水道下水道課
16	水	下水道利用	稲場 紀久雄	前 掲
		下水道管理(附)概論	稲場 紀久雄	同 上
17	木	下水道行財政(口)概論	稲場 紀久雄	同 上
		同 (口)概論	藤 森 正 法	福岡市下水道課長
18	金	同 (口)概論	藤 森 正 法	同 上
		同 (口)概論	藤 森 正 法	前 掲
19	土	工場排水管理	和 井 直 樹	日本下水道事業団研修センター
20	日			
21	月	下水道管理(附)概論	稲場 紀久雄	前 掲
		下水道管理(附)概論	稲場 紀久雄	前 掲
22	火	下水道管理(附)概論	稲場 紀久雄	前 掲
		下水道管理(附)概論	稲場 紀久雄	前 掲
23	水	認可申請手続	鈴木 憲 男	神奈川県下水道下水道課副課長
		認可申請事例解説	大 内 勉	日本下水道事業団研修センター
24	木	同 上	大 内 勉	同 上
		同 上	山 本 哲 夫	建設省下水道部公営下水道課副課長
25	金	ディスカッション	安 久 津 村	日本下水道事業団研修センター
		同 上	藤 藤 一 郎	同 上
26	土	修 3 式	鈴木 憲 男	前 掲

講師一覧・・・担当教授稲場紀久雄となっている。



←左前杉岡(当時福岡県)木股(当時多治見市)左後岩垣(当時北條町)石黒(当時高岡市)島崎(東久留米市)班としては、小島(当時八王子市・写真にはのっていません。)が同じ班でした。

への寂しさが同時にこみ上げてきました。なぜか、仕事に戻りたくないという、すこし感傷的な気分になりました。そんな、こんなの30年前の話ですが、今後の日本下水道事業団のますますの発展を期して私の雑駁な思い出話はおわりとします。
(昭58『認可』受講)

六万人の人の輪

愛知県尾張旭市都市整備部
下水道課浄化センター施設長

山田敏彦



日本下水道事業団研修修了生
六万人達成おめでとうございま
す。心からお祝い申し上げます。

私が初めて研修を受講したのは、下水道課への異動から一カ月もたない昭和59年11月の水質管理Ⅱでした。三週間の研修期間中、専門用語が飛び交う講義に戸惑う私を同室の仲間が助けてくれたのを28年たった今も昨日のこのように思い出します。その後、平成19年に危機管理研修を受講し、今後の下水道経営の厳しさについて学んだことは今の職務に多いに役立っています。その仲間達から、無事退職しましたと書かれた年賀状

をもらうようになり、寂しい思いとともに自らの役所生活の終わりを感ずるこの頃であります。

尾張旭市は、名古屋市の東に隣接する大都市近郊には自然豊かな人口約8万1千人の町です。下水道普及率は、23年度末で約63.4%と全国平均よりも低い状態にあり、市民の皆様から早期の下水道整備を望まれる声が多い状態にあります。尾張旭市は、昭和61年1月に東部浄化センターが、平成12年6月に西部浄化センターを供用開始し現在に至っています。東部浄化センターは、昭和61年1月に供用開始した第1系列の再構築を21年度から始め24年度に完了します。これにより、水処理施設が、高度処理系列と標準活性汚泥法が併設されることになり、運転管理に従来以上の慎重さが要求されるようになりました。

私は、東西両浄化センターの

統括として勤務しておりますが、他自治体同様多くの問題を抱えています。急務の問題として、後継者の確保育成、厳しい財政状況下の業務委託形態のあり方、公営企業化への移行、施設老朽化等への対応は避けて通ることができません。後継者の育成は、知識だけではなく、業務のノウハウを習得させることが重要であると考えます。処理場経営の見直しの課題である業務委託形態のあり方等の問題解決は、市の大切な資産を守る立場から、

高度な専門知識を有していなければならぬとともに情報の確保が重要であると考えます。研修センターは、問題解決の知識

を習得するだけでなく、参集する自治体の事例の意見交換や実務の経験談により、ノウハウを習得できる有益な場であると思えます。昨今、研修所を取り巻く環境も厳しく、研修所の皆さまの多大なご努力により研修が維持されていると聞き及んでいます。研修所の機能が低下することは、私どものように専門職員の育成が困難な自治体にとっては大げさかもしれませんが、下水道事業の存続を危うくする

要因となりかねません。研修所の業務は、華々しい新技術の開発と異なりすぐ成果が得られるものではありませんが、人材育成こそが下水道発展の原動力であると考えます。研修所修了生の一人として、今後とも研修所の機能が発展し続けて欲しいと願わずにいられます。最後になりますが、研修所の皆さまのご健闘と研修所のますますのご活躍をお祈りいたします。

(昭59『水質管理Ⅱ』

ほか受講)



事業団研修の思い出

公益財団法人 山梨県下水道公社
富士北麓浄化センター

後藤 栄 仁



日本下水道事業団40周年を心よりお喜び申し上げます。

私は、5回目の事業団研修として、平成22年度に維持管理コース「包括的民間委託における契約と履行確認」に参加させて頂きました。

この研修では、私自身初めて研修幹事を仰せつかり、3日間の短期とはいえ不安と緊張の中の研修となりました。

また、山梨県と縁のある研修センターの藤生所長（平成4～5年の2年間、山梨県下水道課技術指導監として赴任）、太田研修企画課長（昭和61～62年の2年間、山梨県富士北麓浄化センターの技術援助指導に従事）

の両氏と再会することができ、大変懐かしい思いでした。

さて、本研修ですが、堀内指導教授の下、全国から29名の下水道事業に従事する仲間が参加し、下水道事業団の教授陣を始め、自治体及び民間会社からの講師のご指導の下、包括的民間委託の課題や問題点、履行確認の方法や着眼点といったより実務的な内容の他、受託者側から見た包括的民間委託の問題点や要望事項など興味深い内容の講義が行われました。

また、開講コンパや懇親会など研修に参加した仲間との歓談も重要な意見交換の場となり、お陰様で有意義な研修生活を送ることができました。

当公社で維持管理を行っている4流域の内3流域で既に包括的民間委託の試行導入が行われ、今後は導入効果等の詳細検証を実施する予定であり、本研修で学んだ知識を今後の業務の中で生かしていきたいと考えていま

す。

当公社は、今年4月に「公益財団法人」として生まれ変わり、普及啓発事業や調査研究事業といった公益性の高い事業については、より一層積極的な取り組みと本業の流域下水道施設維持管理業務についても、更なるコスト削減が求められており、包括的民間委託の試行導入を通じて、より効率的な維持管理が実現できればと考えています。

事業団研修では、これからも最新の動向や時代を反映した、より実用性の高い研修内容に期待しています。

私が勤務する富士北麓浄化センターは、富士山の麓、富士吉田市に所在し、山梨県で最初の流域下水道として整備された処理場で、管内には富士山を始め富士五湖や忍野八海といった全国有数の観光地を有しています。近くにおいでの際には、是非一度お立ち寄りください。

最後になりましたが日本下水道事業団の研修事業に携わった関係職員皆様方の長年のご尽力に対し感謝を申しあげると共に、日本下水道事業団の益々のご発展を心よりお祈りいたします。

（平1『処理場管理I』

ほか受講）



6万人の一人 繋がっています みずのわ

岐阜県瑞穂市環境水道部下水道課長

梶浦 要



下水道事業団研修センターの研修生6万人達成おめでとうございます。

突然、加藤教授からお電話があり、久しぶりにお話をさせて頂きました。研修生として初めて受講した時のパワフルな話し振りは、今なおご健在であることに、頼もしくまた嬉しくも思い、今回の原稿依頼を知らない間に受けていました。

瑞穂市は、平成15年に2町が合併して人口5万人ほどの新市となりました。合併前、私の勤務していた町は人口1万人ほどの町で、下水道事業を全く手がけていない状態の中、平成6年度から上下水道課を新たに設置

して下水道事業に着手することとなり、下水道係には私1人が配属され農業集落排水事業からスタートしました。下水道といえば映画のシーンで出てくるような煉瓦で出来ていて人が何人も入れる様な横穴を掘るのかと思っていました。また、下水処理は、微生物によって行われているとは思いませんでした。皆無の知識で始めた下水道の業務は、目の前に来た仕事をこなすだけが精一杯で、今から思うと恥ずかしくも恐ろしいことでもあります。

下水道は、住民説明、計画から工事、予算決算、維持管理、水酸化促進、経営、消費税等、事業団研修のプログラムにあるとおり、実に多岐にわたる事業で、小さな自治体であったため一人ですべての業務をこなさなければなりませんでした。

そのため、事業団研修を計画設計コース認可から始まり事業の進捗に合わせてさまざまなコー

スを活用させていただきました。その時代に合った研修内容が充実していることはもちろん、下水道事業に熱い情熱を持った教授、講師、研修生との出会に期待をしながら戸田駅のホームを降りたことを思い出します。中でも、処理場管理Ⅱの研修では、指定講習ということもあり3週間と長い期間のため、寝起きを共にすると情が移るといふのか別れるのが辛かったのか修了証をいただいた後、それぞれ帰路に急ぐと思いきや、同室の男8人でデイズニールランドに行ったのは、忘れることのできない思い出です。野郎8人で楽しい訳がない。お酒を求めてうろつくも「ランドは夢を売るところでございませうのでご協力を。」と綺麗な言葉をいただき舞浜駅へ向かったことを懐かしく思い出

す。

研修センターで知り合った仲間とは、今でも大切に交流させていただいています。昨年の東日本大震災においては、連絡が取れずに心配していた研修生仲間から、携帯電話に連絡があり無事であったことに安心したとともに、被災地の状況や報道等では聞けない話を聞き災害時の対応が参考となりました。長い

付き合いの中で、人事異動により他部局へ異動したり、市町村合併で組織が全く変わったり、定年退職され第二の人生をスタートしていたりと、その都度連絡を取り合っており、仲間たちの存在が仕事や人生の大きな財産になっています。

6万人の研修生の1人として、研修期間の思い出だけではなく、今なお研修生は繋がりを大切にしていることをお伝えさせていただきます。だくとも、研修センターの皆様方の熱意と努力に感謝申し上げます。

最後に、今後も、研修を通して繋がりを大切にする熱い研修生の水の輪が広がることを期待し、下水道事業団のますますのご発展と、研修生皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。
(平7『認可』ほか受講)



研修生累計6万人達成を祝して

公益財団法人福島県下水道公社
業務部計画設計課

梅津 仁



日本下水道事業団の研修生累

計6万人達成、心よりお祝い申し上げます。これまで熱心にご指導くださり、下水道の技術者育成にご尽力された先生方並びに研修センターの皆様にご心から敬意を表します。

私が住んでいる福島県の下水道整備状況は、下水道普及率48.1%（平成21年度現在）、全国平均73.7%と比べ、まだまだ低い水準です。そんな下水道状況のなか、私が勤務する福島県下水道公社は、阿武隈川流域の3つの流域下水道と大滝根川流域をあわせた4つの流域下水道の維持管理業務および県内各市町村から受託する設計積算業務等をお

こなっています。当公社は、平成24年4月に公益財団の認定を受け、「公益財団法人福島県下水道公社」として、新しくスタートを切りました。これまで以上に福島県下水道の普及率向上・普及啓発、下水道技術支援等、下水道の公益事業を充実しておこなってまいります。

私が在籍している業務部計画設計課は、県内各市町村より主に下水道面整備工事の設計積算業務を受託しています。年々進化をとげていく下水道業界の現状で、新しい技術や情報の共有は重要となつてきます。そのなかで、下水道に関する計画、設計、水質、経営等を初心者レベルから上級者レベルまで勉強が出来る日本下水道事業団の役割・存在は非常に大きいところがあります。

私は、日本下水道事業団の研修に複数回、参加させていただいていますが、初めて研修センターで研修を受講したのは、今

から16年前の平成8年に「実施

設計コース 管きよI」でした。当時は下水道の仕事に携わって1年目だったので、基礎知識もないまま研修に参加し、しかも3週間という長いカリキュラムについていけるのだろうかと思配していたのを覚えています。

研修が始まってしまえば、そんな心配は無用でした。みんな同じ下水道初級者であり、幸いにして年齢的にも同年代の方々ばかりでしたので、研修2日目くらいからは、毎日、毎晩たのしい懇親会の連続で、研修の終わり頃には、東北弁も関西弁も関東弁も、みんな自分のお国言葉のイントネーションが変になるくらい意気投合していました。

「管きよI」コースは、下水道整備の計画、測量、設計、積算を基礎から指導していただけるので初級者だった私には、ありがたい研修でした。さらに当時は長期の研修カリキュラムの中で頭を使った勉強だけでなく、研修期間中に体育や施設見学等の科目があり、体や心のリフレッシュができるとともに、受講生同士のコミュニケーションをさらに深められるきっかけとなり、3週間の研修中、体調を崩すこともなく楽しく過ごせたのを思

い出します。

その後、実施設計コース、「管きよII」や「マンホールポンプ」を受講しました。最近では、新しくコースが創設された「アセットマネジメントと下水道長寿命化計画」を受講しました。

むかし受講した「管きよI」とは違った短期カリキュラムなので、講義終了以降の時間を利用して、夜遅くまでディスカッションに使う資料作成をしています。短期間で資料を作成する大変さはありませんが、与えられた時間に自分たちの考え方や意見を出し合えることは滅多にない貴重な時間だったと思います。また、この事業団研修は、他の研修にはない、講義による知識や技術の習得だけではなく、寮生活を通して他の自治体の方々と下水道の生きた各種情報の交換が出来る、つながりを作れることが最大の特長だと思います。この交友関係は今後の下水道業務をおこなっていくうえで貴重な自分の財産だと感じています。最後になりますが研修生を7万人、8万人達成へと下水道の技術者を育成していただき、みずのわが、ますます大きく広がりますよう、これからの日本下水道事業団の発展とご健勝を

心よりご祈念申し上げます。

（平8『管きよ設計I』

ほか受講）



祝JS40周年と研修の思い出

埼玉県新座市市民環境部長
島崎 昭生

全国の「みずのわ」をご覧の皆さん、ご健勝にてご活躍のことと存じます。

また、本年は下水道事業団発足40周年を迎え、研修生6万人の達成も遂げられたとお聞きしました。これまで研修事業に携わってこられた多くの関係者各位のご尽力にあらためて敬意と感謝を申し上げます。

新座市は、埼玉県の最南端部に位置する面積2,280ha、人口約161,400人の県内中堅都市です。市の東南では練馬区と接し、首都近郊に位置しながら、関東地方でも名高い古刹の一つである平林寺の存在や、武蔵野の面影である雑木林などが多く残され、自然環境に恵まれた緑豊かな住宅都市として発展してきました。下水道事業については、昭和49年度から汚水幹線整備に着手し、ピーク時には毎年約100ha近い面整備を精力的に進めたため、平成12年頃には

認可区域のほぼ100%が整備完了となり、近年では雨水整備と併せて市街化調整区域への認可拡大など、社会経済が低迷する中にあっても都市施設整備への意欲的な姿勢は変えていません。

このような情勢の中、私は平成7年にそれまで5年間在籍していた土木課から下水道建設課へ移籍しました。前述のとおり、わが市の下水道事業史ではちょうど、汚水の面整備完了の目的が立ち、雨水幹線整備へと方向転換する準備段階の時期と記憶しています。懐かしい話ですが、私が事業団研修に参加したのは、配属2年後の平成9年度秋季に開講された管渠Ⅱコースでした。約16年も前のことに改めて時の流れの速さを実感しています。

今も記憶にあるのは、小口径推進工法の設計という研修テーマと栃木県への現場見学その他は、当時の西川口・蕨・赤羽駅の夜の街並み。そして、渡邊先生から紹介頂いた地方の先輩諸氏に、

新座市歴代の先輩による伝統芸？が著名であったこと。毎晩、多くの研修生と川口市の商業振興に貢献したことです。

研修生活は、毎朝清々しい朝日を浴びて土手の散歩から始まり、夕方は、授業終了とともに全国から集う研修生たちと下笹目バス停から西川口駅へ直行。門限ぎりぎりまで、毎日が懇親会とあった日々でした。日常の喧騒から離れた3週間とこれを支えた体力は、最近特に懐かしく思われます。当時のメンバーの皆さん、お元気ですか。是非ご一報ください。

その後も、私は、渡邊先生や事業団との縁から、研修助手など、センタースタッフとして呼んでいただき、他の自治体から派遣されていた講師の皆さんとも交流の機会を得ることができました。この事業団（渡邊先生）を中心とした全国のネットワーク情報システムは、私が下水道実務を遂行するのの際に大変頼りになったことは言うまでもありません。

事業団研修は、知識の習得のみならず、交流により習得する情報は大変貴重であります。全国下水道事業に携わる皆さん、大いに参加し活用すべきと思

ます。

懐かしい思いを乱文にて綴らせていただきましたが、最後に、お世話になりました研修センターと関係者皆様のご活躍とご発展、さらには、全国の「みずのわ」が益々大きくなりますことをご祈念申し上げ、JS40周年のお祝いと御礼に代えさせていただきます。

(平9『管きよ設計Ⅱ』受講)



6万人達成に寄せて

岡山県倉敷市環境リサイクル局
下水道部下水施設課

吉和弘道



この度は日本下水道事業団創立40周年の年に、研修生総数6万人を達成されたとのこと、誠にめでとうございます。その6万人の中の一人として大変嬉しく思います。

私の所属する倉敷市は海や山の自然と古い町並みが融合した人口約48万人の中核市です。観光地として有名な倉敷美観地区、温暖で降雨の少ない気候で白桃やピオーネの生産が盛んな玉島・船穂地区、国産ジーンズ発祥の地で学生服生産量日本一の児島地区、国内有数の規模を誇るコンビナートがある水島地区、金田一シリーズで有名な横溝正史が疎開していた真備地区と見ど

ころがいっぱいです。ぜひ一度おいでください。お待ちしております。

さて、私は過去数回J S研修を受講させていたのですが、最初を受講させていたのは平成18年の「処理場設計II」でした。下水処理場の設計・施工監督担当になって2年目のことで、当時、ベテランの先輩が相次いで異動され、下水道技術者の早期育成が望まれていました。

研修申込みから間も無く、担当の木下教授より幹事要請の電話がありました。私でいいのか、皆さんをまとめるのか、そのような不安を感じる前に承諾してしまい、幹事を務めることとなりました。

研修は3週間という長丁場であり、内容は関連法規から水処理設計、汚泥処理設計、水利計算、高度処理、水質管理までと多岐にわたっておりました。現場実習では、政令市の汚泥資源

化センターを見学し、消化ガス及び焼却灰の利用をお聞きし、省力化への取り組み方、意識の違いを感じ、ディスカッションでは、日頃業務で悩んでいる問題について、皆で夜遅くまで解答を模索したことを思い出します。

研修でいただいた資料は私のバイブル的存在となっており、その後の業務におおいに活用しています。

講義はもちろんのことですが、その他においても研修生活は充実したものでした。

早朝は荒川土手沿いを散歩、昼休みはテニスをしてさわやかな汗をかき、講義終了後は深夜まで続いた懇親会。懇親会ではあまりの親しさ？のために別の研修を受講していた研修生が部屋を変更するという事態にまで発展してしまいました（その節は大変申し訳ありませんでした）。

木下先生を始め14人の仲間にも恵まれ、お互い刺激しあいながら本当に楽しく研修生活を全うすることが出来ました。また、幹事をさせていただいたおかげで親睦をさらに深めることができた実感しております。

当時、一緒にいた研修生の皆様とは現在も情報交換しており、

年賀状のやり取りも続いています。耐震情報をいただいた徳島県のAさん、まちづくりについて教えていただいた青森市のOさん、趣味の写真を送ってくれた東京都のMさんと視察でお世話になった京都市のTさんほか、J S研修で得た財産は、講義による知識と全国の仲間たちです。現在、全国の下水道普及率は75%を超え、建設の時代から維持管理・改築の時代へと転換期を向かえています。

また、人口減少等の社会変化や、地域の実情に応じた水処理の必要性、低炭素化・資源循環への社会的要請など下水道に求められることが多様化しています。さらに東日本大震災を受け、地震や津波に対する下水道施設のあり方も考えていかなければなりません。

J S研修センターには、引き続き下水道の基本はもとより、多様化する課題をフォローする研修を希望すると共に、全国下水道マンのネットワークを構築する場として引き続き大きく期待しております。

最後になりますが、日本下水道事業団の益々のご発展と研修生の方々の益々のご活躍を祈念申し上げます。

〔平18〕『処理場設計II』

ほか受講



研修生6万人達成を祝して

「もつと広がれ！みずのわ」

愛媛県内子町建設デザイン課
上下水道対策班

高嶋 由久子



日本下水道事業団発足40周年を迎えられ、誠におめでとうございませう。また、その喜ばしい節目の年に、下水道事業団研修生6万人達成とのこと、心よりお祝い申し上げます。

今回、お話をいただき、6万分の1（正確には、3回の研修を経ていまして6万分の3）が私だと思ふと何とも不思議な気持ちでした。そして、この記念すべき号に寄稿することになるなんて、とても感慨深いと思います。

私が下水道事業に携わるようになったのは、平成20年の4月からです。これまでと全く違った業種の職務に、戸惑いと不安

な気持ちでいっぱいでした。まず、専門用語が多く何を話されているのかわからないことから始まり、經理のことなど未知の中をくるくると回っている状態でした。それでも、日々の業務は待たなして進み、何がどうなのか分からないまま必死で仕事をしていたように思います。

そんな中、私から不安がにじみ出ていたのか、研修に参加された先輩方から下水道事業団の研修を勧められました。私は、今までに経営コースの3つの研修に参加させていたただいていまして、初めて参加したのは、「下水道の経営」です。ここで、下水道事業全般の基礎の基礎を学びました。講義の中の、加藤教授をはじめとする講師の先生方の言葉は、時に重く、1講義が終わる毎に考えさせられました。そして、その時の自分の仕事に対する姿勢を見直すいい機会でもありました。また、

ポイント、ポイントを抑えた内容は、初心者の方にとつては、これから仕事をしていく上での手がかりを示していただいたように思います。次が、初めての料金改定に取り組むために参加した「下水道使用料」、3回目

が昨年度参加した「企業会計」です。この部署に異動になり、今年で5年目を迎えます。「参加すればきつと自分にとつて何か得るものがある」と先輩に言われたように、これらの研修で得たものは大きく、私にとつてとても有意義な経験となりました。また、何よりも忘れてならないことは、講義は勿論のこと、そこで知り合えた研修生の皆さんと共に過ごした時間です。全国各地から参加された皆さんと、時にはご当地自慢あり、また、それぞれに抱える悩みをお互いに熱く語り合ったこと、人々との繋がりは本当に「宝物」です。

思い悩んだとき、迷ったとき、研修を通して学んだことは、私にとつての「道しるべ」となっています。きっと私だけでなく、そうした思いの研修生は少なくないと思います。下水道事業を取り巻く厳しい情勢の中、どう

か、これからも私たちの「道しるべ」となりえる研修がいつまでも続くことを願ってやみません。

日本下水道事業団のますますのご発展と、全国各地の研修生の皆さまの更なるご活躍をご祈念申し上げます。今後、もつともつと「みずのわ」・人の輪、仕事の輪がひろがっていきますように・・・。

そして、このような充実した時間を作っていただきました先生方、共に研修した皆さまに心から感謝を申し上げます。また、快く研修に送り出していたいただいた職場の皆さんにも感謝しております。

最後に、ここで一言我が町のPRを。私の住んでいる内子町は愛媛のほぼ中央に位置し、人口18,000人ほどの町です。まちづくりのキャッチフレーズ「キラリと光るエコロジータウン内子」、そして、「住んでよし、訪ねてよし、美（うま）し内子」を掲げ、誇れるまちを次世代に繋げるまちづくりに取り組んでいます。歴史あふれる白壁の町並み・自然豊かな村並み・山並み、そしておいしい果物などなど、一度機会があればぜひお越しください。ご案内いたします

よ。
また、いつか皆さまとお会いできる日を楽しみにしております。

（平20『下水道の経営』
ほか受講）



6万人達成を祝して

岡山県浅口市上下水道部下水道課

横 田 節 子



この度、日本下水道事業団の研修生が6万人を達成されたことを研修生の一人として心からお祝い申し上げます。

当市では、毎年1〜2名の職員が研修を受講させていただいております。わたしも、平成21年度に管きよ設計Ⅱを平成23年度に処理場管理Ⅱを受講させていただきました。初めて研修に参加させていただいた当時、わたしの下水道部署での経験は浅く、知識もあまり持ち合わせておりませんでした。それに加え、全く知らない方たちとの慣れない集団での生活に研修への出発前は不安でいっぱいでした。一

日目の夜の食事会、授業での実習・見学を通し打ち解けていくうちに不安は楽しさへと変わっていきました。2回の研修を通して、下水道に関する知識を習得できたことのみならず、普段の仕事の中では知り合うことのできない人たちとの交流、研修ならではの年齢を超えたざっくばらんな交流は今のわたしにとって下水道の知識以上の財産になっています。今でも何か困ったことがあると、他県他市町の事例をお聞きするため、電話やメールで連絡を取らせていただいております。この会報をご愛読の皆様も一度は研修に参加し、下水道の知識以上の財産を習得していただけたらと思います。

当市は、平成18年3月21日に浅口郡金光町、鴨方町及び寄島町が合併して誕生し、「快適・安心・思いやり活力あふれる文化創造都市」という将来像の実

現に向け、総合的・計画的なまちづくりを推進しています。岡山県の西南部の瀬戸内海に面した場所であり、市中心部には山陽自動車道や国道2号線、JR山陽本線、山陽新幹線などの基幹的な交通軸が通っています。

北の遙照山系から南の瀬戸内海まで多様であり、気候は瀬戸内特有の温暖少雨で、過ごしやすく、自然条件に恵まれた地域であり、環境省のレッドリストで絶滅危惧種に指定されているアツケシソウの本州唯一の自生地でもあります。毎年秋になると赤く色づき見ごろをむかえます。食べ物では梨や桃、そうめん、牡蠣やワタリガニが特産となっていますので、お近くにお越しの際は、ぜひお立ち寄りいただきご賞味ください。

下水道事業におきましては、旧寄島町で平成9年3月に供用開始を皮切りに、旧金光町、旧鴨方町でも下水道事業をスタートさせました。現在では、3処理区にそれぞれ終末処理場を有し、普及率が66.3%、水洗化率が74.4%になっています。今後とも、普及率、水洗化率のさらなる向上、そして、自然環境や水質の

保全を目指し、研修で学んだことを生かして適切な整備及び維持管理に努めていきたいと考えております。

最後になりましたが、今まで研修で大変お世話になりました当市の研修生を代表し、更なる日本下水道事業団研修センターの発展と下水道事業に関わる皆様のご活躍を心より祈念し、またこの「みずのわ」がより大きく太い「わ」になっていくことを願い、お祝いの言葉とさせていただきます。

(平21『管きよ設計Ⅱ』

ほか受講)



研修生6万人に寄せて

熊本県熊本市上下水道局下水道整備課

神 崎 陽 介



研修生6万人突破おめでとう
ございます。この数字が、いかに事業団研修がすばらしいか、また、日本の下水道へ貢献しているかを示しているものと思います。熊本市も毎年多数の研修生がお世話になっており、(全国でも上位の受講者数であるとは伺っております)少しはこの数字に貢献できていることと思えますので、この場を借りて本市の宣伝をはさむことをお許しください。

我が熊本市は、4月に全国二十番目の政令指定都市として「九州ど真ん中!日本一暮らしやすい政令指定都市 くまもと」をめぐりながら日々がんばっております。

す。熊本市は日本一の地下水都市であり、人口50万人以上の都市では国内唯一、水道水源を地下水でまかなっております。どの家庭でも蛇口をひねればミネラルウォーターが湧き出す世界的にも珍しい都市です。その豊かな水資源の恵みをうけ、農水産物もおいしいものが揃っております。都市マラソンも開催しておりますので、熊本城を中心とした自然環境と調和した街を駆け抜けてみてはいかがでしょう。ここでは書きつくせないすばらしい街ですので、全線開業した新幹線も利用して、ぜひ一度遊びにいらしてください。さて、本題に戻り研修についてですが、いまさら私がここで述べるまでもないとは思いますが、もしこの原稿を読んでいる時点で研修への参加を思い悩んでいる方がおられるならば、自信をもって参加することをお勧めいたします。慣れない都市に移動して、男ばかりの体育会系

の合宿所のような部屋に押し込められ(女性は別室ですが)年の違う知らない人達と寝食を共にし、さらにはその研修が終わった後に山のようにたまった業務が待っている・・・少し話だけ聞くと、参加することに躊躇する気持ちは十分わかります。何を隠そう私も同じ気持ちでした。しかし帰りには参加してよかったと思えます。(もちろん山のようにたまった業務は待っています、そこは職場の同僚の協力を得てカバーするとして)社会人になって、机に座りながら経験豊かな先生の講義が受けられる環境なんてなかなかありません。普段業務に忙殺されながら、あいまに理解している事などが明確になっていく快感をぜひ味わっていただきたいと思えます。

参加が決まっている方々へのアドバイスとしては、名刺をたくさん用意すること、行き帰りの交通手段は十分時間の余裕を持たせておくことくらいでしょうか。

今後、日本の下水道は世界を見据えてグローバル化が進んでいくことですから、海外からの参加者ができることもそう遠い話ではないかもしれません。

これからも下水道事業団さんの活動を通して、人のわ、循環のわ、持続可能な社会のわ、そして「みずのわ」が益々大きく堅固なものになっていくことを期待しております。私もこの原稿を書きながら下水道に関わる人間として、微力ながらがんばっていかうと決意を新たにいたしました。

最後になりましたが、2度の研修で担当していただいた仲澤教授、山本准教授そして渡邊准教授、本当にお世話になりました。今後ともよろしくお願いいたします。

(平22『事業計画』(認可)

流総計画』ほか受講)



日本下水道事業団研修への感謝と さらなる発展への期待

千葉県佐倉市土木部下水道課

菅谷卓司



この度は日本下水道事業団発足40周年及び研修生6万人達成におめでとうございます。

私は平成22年に下水道課業務班に配属になりました。そこでは設備の検査や受益者負担金の賦課などの業務に加え、下水道事業の企業会計への移行準備を担当することとなりました。

入庁以来税関係の職場ばかりでしたので、下水道事務については全く初めてでしたが、設備の検査などの事務は、親切な先輩に恵まれ丁寧に教えてもらいながらこなしておりました。しかし、下水道事業の企業会計移行については当然のことながら

職場に経験者がおりません。企業会計への移行事務は、短い期間内に今まで築いてきた膨大な

下水道資産の評価、条例規則の改正、企業会計システムの構築等の事務に加え、場合によっては組織自体を大幅に変えなければならず、何から手をつけてよいかわからないまま、途方に暮れていました。そのような中、下水道事業団の経営コース「企業会計」研修の募集を目にし、飛びつくようにして参加させていただきました。

研修にはわからないことをここでしっかり教わろうという気持ちで参加しましたが、いざ授業が始まるとその分量の多さ、内容の濃さに圧倒されました。また、企業会計への移行直前の団体の方々には移行期間の押し迫った中で参加されており、連日休憩時間も返上し講師を質問攻めにするなどとても緊張感のある

雰囲気の中授業が進んでいったことが思い起こされます。初めは授業にくらいついていくことで精いっぱいでしたが、日々目の前の霧が晴れていく感じで大変有意義な研修でした。これも難しい内容をわかりやすく解説して下さった加藤教授をはじめ、講師の方々のおかげだと感謝の思いでいっぱいです。

講義内容が大変充実していたこともさることながら、研修を受けさせていただいた後、職場に戻り、実際に事務を再開したときに改めて研修のありがたさを感じるようになりました。充実した研修生活を終え職場に戻ると資産評価方針の決定などの具体的な事務が待っていました。研修のおかげでスムーズに事務を進めていくことができますが、やはり調べるほどに細かい点に関する疑問がぞくぞくと出てきます。そんなときには5日間同じ釜の飯(食堂ですが)を食べた研修生の方々には気軽に相談することができず。鳥取市の塩さん、茅ヶ崎市の谷久保さん、相模原市の布川さん、富士市の齊藤さんをはじめ多くの方々

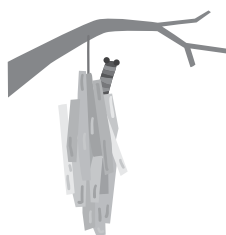
に意見伺い、お忙しい合間を縫って資料を探して送付していただくなどしていただいたおかげで、これまでの日々を乗り切ることができたと感謝しております。

その後経営コース「消費税」にも参加させていただきましたが、このときは研修幹事をご指名いただき、ますます人の輪を広げることができました。

今後は厳しい財政状況の中、下水道事業にはさらなる効率化が求められてきます。それぞれの自治体で知恵を出し合いこの難局に立ち向かっていかなくてはなりません。しかし、個々の力には限りがあります。そこで下水道に関する知識と経験の集合体ともいえる日本下水道事業団からノウハウを得ることができ、横のつながりも築くことができる研修事業のもつ意義は今後もますます大きくなっていくと思えます。

最後になりますが、日本下水道事業団のさらなる発展と全国6万人の研修参加者のさらなる活躍を心より祈念申し上げます。

(平22『企業会計』ほか受講)



「みずのわ」の 更なる広がりへ期待して

熊本県荒尾市建設経済部下水道課

清水 美 幸



事業団創立40周年の年に研修
修了生が6万人を突破されたの
こと、誠におめでとうござい
ます。心よりお祝い申し上げます。

私が勤務する荒尾市は、熊本
県の西北端にある人口約5万6
千人の地方中小都市です。下水
道事業は昭和44年1月より事業
着手し、これまでも多くの諸
先輩方が事業団研修を受講し、
下水道の普及に多大なる貢献を
していただいています。

一方で経営面でも近年建設か
ら維持管理の時代へとシフトし
つつある状況で企業会計導入の
検討が始まり、私が下水道課へ
配属されて3年目の平成22年12

月に基本計画を策定し、平成26
年4月に企業会計導入が決定し
ました。

まずは手始めにと事業団地方
研修の「企業会計」を受講しま
したが、作業量の膨大さに頭が
真っ白になり、加藤教授の講義
の最中不安ばかりが募っていき
ました。

翌年度企業会計移行専任とし
て選ばれ、早速地方研修でいた
だいた資料をもとに作業に入り
ましたが、私自身理解が不十分
な作業内容もあり、不安な気持
ちは拭えないままでした。この
不安を解消すべく、予算確保が
厳しい状況は承知の上で「企業
会計」の受講を上司へ要望しま
した。

こうして平成23年9月、「企
業会計」を受講する運びとなり
ました。

研修生は北は北海道から南は
沖縄まで全国から43名の参加
があり、企業会計への関心の高ま
りを感じました。

進捗状況は様々でしたが、こ
の研修にかける意気込みを他の
研修生から強く感じ、初日から
刺激を受けました。

加藤教授の講義も要点をつい
たテンポの良い講義であつとい
う間に一日一日が過ぎていきま
した。夕食後の談話室も毎晩多
くの研修生が集い、各団体の下
水道ネタを酒の肴に白熱した議
論が展開され、加藤教授にも連
日遅くまでお付き合いいただき
ました。時には脱線してプライ
ベートなことも話したりと、こ
の空間は私にとって息抜きの場
でもあり、貴重な時間でした。

肝心な研修内容も簿記の基礎
から企業会計導入の流れや意義
先進自治体からの講義等地方研
修以上に内容が濃く、充実した
5日間でした。また、研修を通
して企業会計導入に必要な情報
を適切に仕入れ理解し、知識と
して蓄えることがいかに大事か
を痛感した5日間でもありまし
た。企業会計導入は一度きりの
作業である事に加え、下水道事
業が任意適用であるがゆえに会
計処理一つを取っても実に手法
も様々で、情報をいかにして収
集し、その中で自分の団体に合っ
た最適な選択をしていく必要が
あります。今はインターネット

で様々な情報を安易に入手でき
ますが、結論や結果は得やすい
一方、そこまで至った経緯や
プロセスは得にくい構造となっ
ているように感じます。

こういう時こそ事業団研修の
ような「交流の場」が必要です。
研修所内では様々な業務の一連
の流れを体験談等を交えて聞く
ことができ、そこから最適な選
択をするための様々なヒントを
得る事ができます。同時に人と
人とのネットワークも形成され
そこが情報源となり、ここで得
た情報が今後の業務を進める上
で大事なポイントとなっている
ことがわかりました。

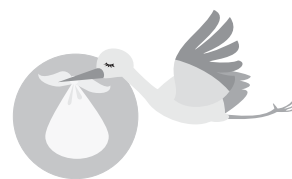
また、受講後もメールで相談
しあう等継続したネットワーク
が形成され、業務を行う上で大
変役立つています。今後も時代
のニーズに即した研修を企画さ
れ、「交流の場」として全国各
地から求められるような存在で
あり続けていたとき、更なる「み
ずのわ」の広がりを期待したい
ものです。

最後にこのような機会を与え
ていただいた加藤教授に感謝を
申し上げますとともに、下水道事
業団の益々の発展と全国の研修
生のご健勝、ご活躍を祈念いた
しまして、駄文ですが寄稿とい

たします。

（平22『企業会計』（地方研修）
ほか受講）

ほか受講



（編集部注）
清水様は妊娠8カ月でいらっ
しゃいます。この号が発行さ
れる頃にご出産のご予定と
のことです。

研修の思い出

北海道北見市企業局下水道課

齊藤裕子



J S 発足40周年、研修生累計6万人達成おめでとうございます。

私は下水道の部署に来て2年目の平成23年度に「管きよ設計II」を受講させて頂きました。通常の業務は計画担当ということで、事業計画策定と予算、認可事務、長寿命化計画策定などが主な仕事で、数本の下水道新設工事を担当していただけでしたので、技術的な経験はほとんどない中で研修に参加させて頂きました。担当は渡邊先生で、以前から先生と親交のある職場の先輩から紹介を受け、研修に参加する前からお電話でお話させて頂いただけただけは大変心

強かったです。北見市からは、ここ数年毎年数名ずつ研修に参加させて頂いておりませんが、申し込みをするたび、渡邊先生から電話でご連絡をいただきお話できるのは大変ありがたく、またうれしいです。

研修の中ではディスカッション課題が特に印象に残っています。研修初日にいきなりディスカッション課題提案の説明を皆の前でするのはかなり「どきどき」ものでした（しかも私は一番手）。その後、班の中で役割を決める頃から皆とも打ち解けてきて、相談をしながら課題に取り組みまとめ、最後には班として皆の前で発表し、質疑応答するという研修は、大学以来で、下水道について勉強になっただけでなく、行政のなかでも役立つ大変有意義な科目であったと思います。また、このとき、職場の皆さんにも課題を送り、色々と調べてもらい、休み時間に連絡をもらったりとすごうれ

しくて、離れてわかる家族のありがたさのような気持ちになりました（少し大きですが・・・）。

寮生活では、4人部屋で同じコースの方が1名、維持管理コースの方が2名でした。高校は理系クラスで女子数名、大学も土木工学科で女子数名、職場では課内で女一人という、これまで男性ばかりの中で生活している私にとっては、女性の中で生活できるか?!と多少不安でしたが、おそらく同じような道を歩んできたさばさばした女性ばかりですぐに打ち解け、何の遠慮もなく（逆に迷惑かけていたらごめんなさい）毎日を過ごすことができました。特に、同じコースだった大館市の三沢さんには毎日晩酌を付き合ってもらったり、仕事のことやプライベートのことなどいろいろお話させてもらい、大変お世話になりました。

毎日の夜の研修では、各地のお酒や名産品を楽しみました。当市からは、オホーツクビール、鮭とばなどを提供しました。外で豪遊するグループをよそに、まったりと談話室でテレビを見ながら過ごす我々グループ、たこ焼きや鍋を作り食べる（ときどきおすそ分けをくれる）グループと様々でしたが、それぞれ夜

の研修も楽しんでいました。夜の研修でも下水道の話がでるあたりは、皆まじめで、こういう若い人たちがこれからの日本の地方都市を担っていくと思うと、心強く感じました（これも大きいです）。また、敢えて名前は伏せておきますが、最年少選手は、研修最終日にお金がそこをつき、みんなでカンパしたのは、いい思い出です（その後、きちんとお礼を兼ねた年賀状もくれました）。

全国各地から研修生が集まり、知識を習得するとともに情報交換をし、人脈がつながり、これらを行政に生かせるのはとても重要なことだと思います。下水道に関わる皆さんがぜひ事業団研修に参加されることをお勧めするとともに、研修センターのますますのご発展とみなさまのご活躍をご祈念いたします。
〔平23『管きよ設計II』受講〕



研修生累計6万人達成を祝して

神奈川県厚木市河川みどり部
下水道施設課

今井博美

日本下水道事業団研修センター
発足40周年、おめでとうござい
ます。また、この記念すべき年
に研修修了生が六万人を達成さ
れたとのこと、誠にめでと
うございます。私は平成23年度の
維持管理コース「管きよの維持
管理」専攻第2回を受講させて
いただいた縁で、お祝い申し上
げます。

まず、この場をお借りして、
私が勤務している厚木市を簡単
に紹介させていただきます。厚
木市は、神奈川県中央に位置
し、相模川の右岸に開けた扇形
の地形で、西北部には丹沢山地
が連なり豊かな自然に恵まれる
とともに、交通の要衝という地
理的な利便性と先人のたゆまぬ
努力により、首都圏における流
通・業務機能を担う拠点都市と
して成長してまいりました。下
水道の整備については、都市基
盤整備の一環として昭和37年か
ら着手し、現在、下水道全体計
画区域は約5,866haで、

そのうち約3,292haにお
いて下水道法事業認可を受けて
おります。平成23年度末での整
備状況は、事業認可区域に対し
て汚水は約98.0%、雨水は約65.9%
となっております。

六万人を達成された事業団研
修には、わが職場からも多くの
先輩方が受講され、宿泊期間中
の楽しい噂はかねがね耳にして
おりました。私も事業団研修を
受講できると決定した時には、
実践的な基礎知識を習得したい
気持ちと女子が一人でないこと
を願う気持ちでいっぱいでした。
維持管理コースの受講生の男子
メンバーは、北は北海道から南
は沖縄県まで全国から集まって
きた18人と女子メンバー山口県
防府市の照喜名さん、私の20人
でした。彼女とは研修期間中、
寝食を共にし、とても楽しく過
ごすことができました。同じコー
スのメンバーとは、毎晩談話室
で同じ悩み事を抱えながら業務
にあたっていることや、お国自

慢など毎晩遅くまで語り合いま
した。最終日は夜中2時まで他
愛もない話で盛り上がり、翌日
寝不足になってしまったことを
思い出します。研修後半には、
女子フロアに秋田県大館市の三
沢さんと北海道北見市の齊藤さ
ん、長野県飯山市の清水さんが
合流し、女子力がパワーアップ
しました。職場を出発し研修セ
ンターに到着した時から、受講
生の一人としてコース単位での
結束力の中で、新たな仲間に出
会えた楽しい14日間でした。こ
の職場を離れていた期間、上司
や同僚には、なにかと支援して
いただいたこと、とても感謝し
ています。

これからは、研修で学んだ知
識を発揮できるよう、そしてま
た、土木技術者として下水道を
市民の方々にもっと身近に感じ
ていただけるよう、日々の業務
を通して恩返ししていきたいと考
えています。

最後になりましたが、日本下
水道事業団研修センターのご発
展と全国六万人の研修修了生の
方々のますますのご活躍をお祈
りして、結びの言葉とさせてい
たきます。

(平成23「管きよの維持管理」

受講)

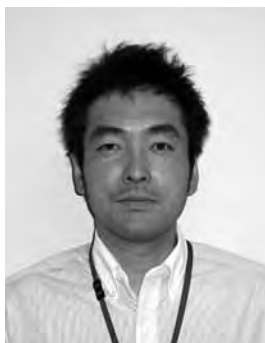


最後列一番左が筆者

『研修生累計6万人達成を祝して』

島根県出雲市上下水道局下水道建設課
公共下水道2係技師

古山 裕 一



この度、日本下水道事業団研修センター発足40周年を迎えられる記念すべき年に、研修生が6万人を達成され誠におめでとうございます。

40年を迎えられる今日まで、研修センターの運営に携わられた皆様には敬意を表する次第です。

さて、私が研修センターでお世話になったのは、平成23年のことです。出雲市職員として採用されてから14年が経った昨年初めて下水道課配属となりました。

本市からも、毎年のように研修に参加しておりますが、私は初めての下水道ということもあ

年月を重ね忘れていた初心や新鮮な考えを思いおこさせる一時でもありました。こういった、普段出来ない交流が出来るのも研修センターがあればこそと、感じました。

当市も、まだまだ汚水の未整備エリアがありますが、近年の財政事情や建設から維持管理の時代に移行しつつある昨今の社会情勢により工事件数・工事規模の縮小、技術職員の減少などで、担当現場で経験することや諸先輩方からの技術継承といったものが少しづつ薄らいでいるのかなと感じます。また、限られた人数と予算でより良い下水道事業を進めていくうえで、一人ひとりの知識・技術力・アイデアが更に求められていると思います。

このような中、技術・知識の習得場として1度では無く経験に併せて2度・3度と研修センターに参加していくべきだと思いますし、その時々々に求められる魅力的な研修を今まで以上に企画・実行していただきたいと思えます。

最後になりましたが、日本下水道事業団研修センターが下水道事業に携わる技術者のよりどころとして、ますますの発展と

ご活躍をされることを期待いたします。

(平23 『管きよ設計Ⅰ』受講)



研修生6万人達成記念寄稿

同窓会ニュース

交流の輪「さいと会」

(元)研修部助教授
(元)東京都下水道局

安彦 四郎

この度J S 研修40周年を迎え
ると共に、同研修生6万人達成
という二重の記念すべき偉業に、
心よりお祝いを申し上げます。

さて、標題にある「さいと会」
のルーツを辿ると、昭和50年（1
975年）に埼玉県大宮市（旧）
と東京都の有志が研修部（当時）
近くのグラウンドでソフトボー
ル親善試合を行い、汗をかいた
試合後の懇親会での交流が出発
点となっており。以来、両
者の交流は40年近く、切れ目な
く続いております。

この間の研修センターの建物、
施設等の変貌ぶりに目を見張り、
また今回の研修生6万人達成を
知り、改めて充実かつ楽し
かった研修部時代を懐かしく思
い出されました。

「さいと会」の名称は、埼玉

県・さいたま市の「さい」と東
京都の「と」に由来しており、
会員数はJ S 研修センター、県・
市及び都を含め、現在35名を数
えております。

「さいと会」の舞台として、
さいたま市の場合は「桜の名所・
大宮公園」、「盆栽村」、「鉄道博
物館」等、また東京都の場合は
「六本木ヒルズ・東京ミッドタ
ウン」、「三河島水再生センター
（荒川区内）」、「相撲・両国界限」
等の名所、下水道施設などの見
学を兼ねて、交流を重ねてきま
した。

今年（平成24年）の4月には、
さいたま市の中央に位置する名
所「見沼田圃（たんぼ）」、「桜
の見沼代用水」、「閘門式開閉運
河の跡地」（見沼区内）などを
見学しながら散策しました。当



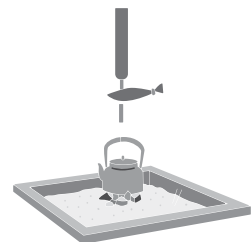
平成24年（2012年）4月さいたま市見沼代用水



平成23年（2011年）10月東京墨田区両国

日は天候にも恵まれ、参加者一
同、江戸時代に築かれた田圃の
原風景や通船堀の水風景にすっ
かり魅了されました。
散策後に、相撲茶屋で行われ
た懇親会では「ちゃんこ料理」
を囲みながら、当時の研修部の
思い出話などに華を咲かせると
共に、今後とも一層、J S 研修
センター、県・市及び都との交
流を深めていくことを誓い合
いました。

来年（平成25年）の開催地は
東京都内を予定しており、今か
ら場所の選定やその準備に余念
がありません。
最後になりましたが「さいと
会」一同は、今後のJ S 研修セ
ンターの更なる発展と近い将来
の研修生10万人の達成を祈念し
てやみません。
(元)研修部助教授
昭和59年〜61年度



…研修と出会いに感謝…「宮山会」

山形県村山総合支庁
建設部次長

志 田 孝 仁



り返ってみると、初めて事業団研修を受けてから既に30年近く経っていた事に驚きと時の速さを感じています。

【研修生活と出会い】

研修センターへは昭和58年に「管渠IIコース」を受講し、3週間ほど戸田の施設でお世話になりました。長期研修の不安と首都圏での楽しみ(当時は独身)を抱えた研修生活のスタートでしたが、同室の仲間や研修センターの心配りからそんな不安は一気に払拭されたのを覚えています。

先日、研修センターの渡邊先生から『みずのわ』の原稿依頼の連絡が入りました。久々に聞く美声からは元気に御活躍されている姿が直ぐに感じ取られました。ただ、物書きが苦手な私にとって多少荷が重い感が湧いてきました。が、「これまでの思い出を文字にして」と一気に押し切られてしまいました。(恐れ入ります)

これまで全国から約6万人の研修生を受け入れ、今年でJS40周年を迎えるとの事でした。私も間もなく卒業を迎える歳になりましたが、改めて自分を振

たが。(確かに雪国の方が多かった様に思います)

当時、研修所にはプレハブ風の厚生棟(?)があつたのを記憶しております。

研修生と先生が一同に介して親交を深める場となりましたが、お陰様で以後仕事上でもプライベートにおいても大変貴重な場であつたことは否定出来ません。

【下水道の歩みと研修生】

研修当時の山形県の下水道普及率は20%前後(平成23年度末で73.2%)で着手率も低く、県においては組織体制を充実させながら普及率の向上を図ることに全力を注いでおりました。特に流域下水道3処理区の早期の供用開始を目指すことと、公共下水道事業への新規着手を重点的に取り組むことが最優先で、この頃から県内の市町村の研修生も次第に多くなってきたように感じています。

一方、事業箇所が増えることと算の確保や課題なども多くなり、霞ヶ関や事業団に相談する機会も増え、研修を通してご紹介いただいた方々との縁に改めて感謝する次第でした。

【つながりと絆】

そして縁と言えば、宮城県と山形県の交流があります。現在『宮山会』として交互に開催していますが、始まりは平成4年です。20年近いお付き合いになります。私が初めて参加させていただいたのは平成10年の天童温泉の時で、両県はもとより川崎市、足利市、草加市、大和市の皆さんも勢揃いし、下水道談議と個性再発見で宴が盛り上がったのを懐かしく思います。

今年も10月に山形の地で開催されることになり、お馴染みの面々が集うこととなりました。

今では、岩手県・陸前高田市・郡山市・南会津町・千葉市・佐野市も加わり年々参加都市が増えていることに驚いております。老いも若きも一緒になって語り合える付き合いが、研修と渡邊先生から始まり、その輪が広がり、そして絆を深めています。(有難い事です)

【むすびに】

山形県の下水道も維持管理の時代に入りました。長寿命化や再生可能エネルギーの検討など新たな課題にも取り組んでいます。しかし、昨年発生した東日本大震災と原発事故による影響

も東北地方には大きな課題として残っています。復旧・復興に向け多くの力を必要としている今、隣県としても継続して支援を続けながら、共に頑張っていきたいと思っております。

40周年という節目を迎え、日本下水道事業団研修センターの益々のご発展をお祈り申し上げます。(昭57「管きよ設計II」受講)



■ 研修センターのあゆみ ■

昭和 47年	11・1	下水道事業センター発足 初代研修部長 岩崎 保久就任
昭和 48年	2・6 5・ 12・27	研修部で研修開始 プレハブ校舎完成 試験研修本館着工
昭和 49年	1・16 12・1	研修会報(研修みずのわ)創刊 第2代研修部長 丸山 速夫就任
昭和 50年	3・25 4・16 8・1	試験研修本館竣工 初代試験研修本部長 池田 一郎就任 日本下水道事業団発足 第2代本部長 岡崎 忠郎就任
昭和 51年	3・14 8・1 11・21	第1回下水道技術検定試験実施 第3代研修部長 橋本 定雄就任 第2回検定試験実施(以後毎年11月 中旬実施)
昭和 52年	2・16 4・1	第3代本部長 上田 伯雄就任 第4代研修部長 武田 篤夫就任
昭和 53年	4・1 11・16	第4代本部長 遠藤 文夫就任 常任参与 安田 靖一就任
昭和 54年	6・9	第5代研修部長 野端 利治就任
昭和 55年	10・1	第5代本部長 卜部 壮一就任
昭和 56年	3・31	研修修了生(延べ)7,603人となる
昭和 57年	6・5 11・1	第6代研修部長 伊阪 重信就任 事業団設立10周年を迎える
昭和 58年	4・1 8・29 11・16	常任参与 藤井 秀夫就任 研修修了生1万人達成 第6代本部長 中村 瑞夫就任
昭和 59年	4・12 4・27	試験研修本部を技術開発研修本部 に名称変更する。 第1回「研修部OB会」開催
昭和 60年	1・1 3・27	第7代研修部長 真船 雍夫就任 新厚生棟完成
昭和 61年	4・25 10・1	第2回「研修部OB会」開催 第7代本部長 苔米地 行三就任
昭和 62年	3・31	研修修了生(延べ)14,311人となる
昭和 63年	1・1 4・1 4・28	第8代研修部長 石川 廣就任 第8代本部長 千葉 武就任 第3回「研修部OB会」開催
平成 元年	9・1	常任参与 村上 仁就任
平成 2年	3・31 6・11 10・8	本館改修工事竣工 第9代研修部長 亀田 泰武就任 第4回「研修部OB会」開催
平成 3年	7・16 7・26	第10代研修部長 石川 忠男就任 研修修了生2万人達成

平成 4年	4・1 4・1 11・1	第9代本部長 清野 圭造就任 第11代研修部長 星隈 保夫就任 事業団設立20周年を迎える
平成 5年	3・26 7・1	第5回「研修OB会」開催 常任参与 北井 克彦就任
平成 6年	7・1 10・7	第10代本部長 小林 紘就任 研修修了生2万5千人達成
平成 7年	7・5	総合実習棟竣工
平成 8年	4・1	第12代研修部長 竹石 和夫就任
平成 9年	3・20 9・29 11・1	本館改修工事竣工 研修修了生3万人達成 事業団設立25周年を迎える
平成 10年	3・24 7・14 8・1	研修業務報告会開催 第11代本部長 黒沢 有就任 参与 内田 信一郎就任
平成 11年	4・1	第13代研修部長 大嶋 吉雄就任
平成 12年	6・30 7・3	研修修了生3万5千人達成 第14代研修部長 渡部 春樹就任
平成 13年	1・20 4・16	第12代本部長 中橋 芳弘就任 参与 福智 真和就任
平成 14年	4・1 11・1	第15代研修部長 篠田 孝就任 研修修了生4万人達成 事業団設立30周年を迎える
平成 15年	4・16 10・1	参与 色摩 勝司就任 「特殊法人整理合理化計画」に基づき、 日本下水道事業団が地方共同法人となる
平成 16年	4・1	組織再編により、「研修センター」に名称 変更 第16代研修センター所長 大嶋 篤就任
平成 17年	4・1 8・1 10・21	第17代研修センター所長 成田 愛世就任 第13代本部長 安藤 明就任 研修生4万5千人達成
平成 19年	4・1	第18代研修センター所長 高島英二郎就任
平成 20年	1・19 1・30	研修修了生5万人達成 研修修了生5万人達成記念行事開催
平成 21年	7・14	第19代研修センター所長 藤生 和也就任
平成 22年	4・1 4・22 8・3 3・11	第14代本部長 村上 孝雄就任 研修修了生5万5千人達成 研修業務検討委員会設置 東日本大震災
平成 23年	4・1 9・21	国際展開コース新設 臨時研修「地震対策」実施
平成 24年	4・17 11・1 11・22	研修修了生60,000人達成 事業団設立40周年を迎える 臨時研修「放射能対策」実施



昭和52年の航空写真（埼玉県提供）
 本館(新旧堤防の間に建設)、プレハブ棟(S48・49年度研修に使用)



総合実習棟予定地（左側）と本館（S57.3.6）
 荒川旧堤防撤去中



総合実習棟竣工式（H7.7.5）



総合実習棟竣工

教員 (昭和47年～平成24年)

4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24			
⑨ 清野 圭造 自治省		⑩ 小林 紘 自治省			⑪ 黒沢 宥 自治省		⑫ 中橋 芳弘 自治省				⑬ 安藤 明 総務省		⑭ 村上孝雄(ブ)										
⑪ 星隈 保夫 建設省		⑫ 竹石 和夫 建設省			⑬ 大島吉雄 建設省		⑭ 渡部 春樹 建設省		⑮ 篠田 孝 国土交通省		⑯ 大嶋篤 プロパー		⑰ 成田愛世 プロパー		⑱ 高島英二郎 国土交通省		藤生和也 国土交通省						
中村 益美(東京都)		望月 保(東京都)		大村 昇(横浜市)		岩佐 行利(東京都)		高橋 文行(東京都)		秋葉 誠(東京都)		内村 公省(ブ)		松崎 精廣(ブ)									
(横浜市) 増田 保政(横浜市)		小松原 修義(東京都)			久保田 隆久(横浜市)		大浪 渉(横浜市)		堀内 健二(ブ)		木山 泰志(ブ)		荒井 俊博(ブ)		平林正行		山田雅利						
戸邊 貞次郎(東京都)		酒井 勝利(東京都)		桑山 明夫(ブ)		木下 勲(ブ)		平本 重夫(横浜市)		渡邊 良彦(ブ)													
弓倉 純一(ブ)		村上 忠弘(ブ)			安達 健治(ブ)			石川 眞(横浜市)		仲澤克彦(横浜市)		福田勝宏(横浜市)											
								加藤 壮一(ブ)		加藤 邦彦(ブ)		太田 秀司(ブ)											
(大阪市) 斎藤 正裕(埼玉県)		岩井 章(埼玉県)		福島 英雄(埼玉県)		庄司 利夫(埼玉県)		島飼 定夫(埼玉県)		横井 千秋(東京都)													
中澤 均(ブ)		萩原 昇(東京都)		田村 正明(東京都)		岸 勘治(東京都)		二ノ形 一哉(大阪市)		高橋 淳(東京都)		濱田史郎(埼玉県)		山本孝治(埼玉県)									
(埼玉県) 高石 享(大阪市)		佐崎 俊治(大阪市)		高島 正行(東京都)		水口 忠行(東京都)		小池 秀三(ブ)		明石 哲也(ブ)													
(東京都) 岡澤 邦明(建設省)		小澤 和夫(大阪市)		町田 崇(横浜市)		北澤 正彦(ブ)		渡邊 良彦(ブ)		東條 光夫(ブ)		渡邊 良彦(ブ)											
(東京都) 中村 英治(横浜市)		鮫島 和夫(東京都)		松本 広司(大阪市)		丸山 芳男		加藤 壮一(ブ)															
(横浜市) 広瀬 久雄(横浜市)		渡辺 充(横浜市)		加藤 壮一(ブ)																			
(東京都) 今村 加(ブ)		桑山 明夫(ブ)		扇原 博(横浜市)		成田 愛世(ブ)		下川原祐也(ブ)		平林正行(ブ)		渡邊 良彦(ブ)		高瀬 智(ブ)		本多 大(ブ)		太田 秀司(ブ)		石井 宏和(ブ)		遠田 和行(ブ)	

■ 研修センター歴代幹部職員

	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	元	2	3	
本部長			① 池田一郎 横浜市	② 岡崎忠郎 建設省	③ 上田 伯雄 建設省	④ 遠藤 文夫 自治省				⑤ 卜部 壮一 自治省			⑥ 中村 瑞夫 自治省		⑦ 苔米地 行三 自治省		⑧ 千葉 武 自治省				
研修部長 研修センター 所長	① 岩崎保久 東京都			② 丸山速夫 東京都	③ 橋本定雄 東京都	④ 武田篤夫 横浜市			⑤ 野端 利治 横浜市				⑥ 伊阪 重信 横浜市		⑦ 眞船雍夫 横浜市		⑧ 石川廣 横浜市		⑨ 亀田泰武 建設省	⑩ 石川 忠男 建設省	
教授				黒野 良夫 (東京都)				高野 稔 (東京都)		稲場紀久雄 (建設省)			石橋 信利 (浦和市)			石川 好夫 (横浜市)			河内 康伸 (東京都)		
				伊藤 久蔵 (仙台市)	木村 慶見 (仙台市)		松橋武智雄 (青森市)			畑田 晋 (東京都)			内山 洋 (東京都)			石川 旭 (東京都)				永野 博敏	
						中村 正雄 (プ)				小沢 治夫 (福井市)			菊池 正直 (プ)			熊井 知次 (八王子市)			明石 哲也 (プ)		
助教授	森 忠洋 (プ)	谷口 尚弘 (東京都)				亀田 宏 (東京都)			多田 實 (横浜市)				和田 直登 (東京都)	川村 吉晴 (東京都)			吉田 和夫 (横浜市)			色摩 勝司	
	吉野 宣久 (横浜市)			相澤 靖 (横浜市)		中務 幸雄 (西宮市)		四井 輝夫 (西宮市)		外崎 克久 (東京都)		橋本 良之 (埼玉県)	伊藤 寿三郎 (埼玉県)		兼崎 文雄 (埼玉県)				一九務 (プ)		
		菊池 正直 (プ)				渡部 剛弥 (横浜市)		近藤 雅彦 (埼玉県)	船橋 幹夫 (埼玉県)		小座間 国雄 (横浜市)				島田 正夫 (プ)				小川 和夫		
			渡辺 克宏 (尼崎市)		野口 弘行 (横浜市)		下村 八郎 (横浜市)	浜 武之 (横浜市)			角田 孝雄 (東京都)				中村 明人 (東京都)					町野 豊	
			望月 保 (東京都)		岩田 定夫 (東京都)			橋場 弘雄 (東京都)	岡本 文夫 (横浜市)					仙波 久欣 (東京都)						佐々木 靖男 (東京都)	
			馬場 靖男 (東京都)		土屋 弘 (東京都)			関田 光延 (東京都)	安彦 四郎 (東京都)					実方 敏彦 (東京都)						山田 助義	
				新井 正明 (埼玉県)	稲場 紀久雄 (建設省)					村井 直樹 (東京都)										高橋 賢治 (プ)	志村 利夫
													若林 茂 (横浜市)								石井 吉治 (横浜市)
							戸邊 貞次郎 (東京都)						諸橋 伍一 (東京都)								
															弓倉 純一 (プ)						渡邊 良彦 (プ)
研修企画課 長	西田 哲夫 (建設省)			伊阪 重信 (横浜市)		奥田 康 (東京都)		佐藤 昭男 (東京都)		田中 良治 (東京都)		中田 三喜雄 (東京都)			小野 保和 (東京都)					大塚 将夫	

【お知らせ】

まだ間に合います！

11月から開講する専攻の募集について

11月から開講する下記講座は、まだ定員に余裕がありますので、お申込みいただけます。
ご参加を検討されておりましたら、この機会にぜひご参加くださいます様、お待ちしております。

コース	専攻名	研修期間	受講料
計画設計	下水道事業の計画 (都道府県構想)(第2回)	12月5日 ～12月14日	76,000円
計画設計	下水道事業と 地球温暖化防止	1月24日 ～1月25日	26,000円
経営	下水道使用料	11月12日 ～11月16日	61,000円
経営	受益者負担金	12月10日 ～12月14日	61,000円
経営	滞納対策	11月26日 ～11月30日	61,000円
経営	接続・水洗化促進と情報公開	1月21日 ～1月25日	61,000円
実施設計	管きよ設計Ⅰ(第3回)	11月26日 ～12月7日	85,000円
実施設計	管きよ設計Ⅰ(第4回)	1月21日 ～2月1日	85,000円
実施設計	管きよ設計Ⅱ(第4回)	11月28日 ～12月14日	97,000円
実施設計	管きよ設計Ⅱ(第5回)	1月16日 ～2月1日	97,000円
実施設計	設計照査(会計検査)	12月10日 ～12月14日	61,000円
実施設計	処理場設備の設計(機械設備)	11月6日 ～11月16日	81,000円
維持管理	管きよの維持管理(第2回)	11月27日 ～12月7日	81,000円
維持管理	処理場管理Ⅱ(第2回)	12月3日 ～12月14日	85,000円
維持管理	処理場管理Ⅱ(第3回)	1月21日 ～2月1日	85,000円
維持管理	電気設備の保守管理	1月15日 ～1月18日	56,000円
維持管理	水質管理のトラブル対応(実験編)※	1月16日 ～1月18日	51,000円
維持管理	処理場設備のトラブル対応	11月20日 ～11月22日	51,000円
国際関係	下水道国際水ビジネス・国際 展開・官民連携※	11月6日 ～11月9日	56,000円

(お申込みにあたってのご注意)

- 1、受講料は全て消費税込の金額です。
- 2、受講料の他に宿泊費として1泊あたり3,400円(3食込み)が必要になります。
(「下水道事業と地球温暖化防止」専攻を除く。この専攻は、地方研修であり、設定宿舎はありません。)
- 3、専攻により研修決定の通知時に、参考図書を指定しますので、職場等がない場合は別途図書費が必要となります。
- 4、※のコースは、地方公共団体職員及び民間事業者を対象としたコースです。
- 5、所定の「参加申込書」「調査票」を作成の上、当研修センターまで直接お申し込みください。
- 6、各専攻の詳しい内容は、当事業団ホームページ(<http://www.jswa.go.jp/>)に掲載の研修募集案内をご覧ください。上記ホームページにおいては、「参加申込書」「調査票」様式のダウンロードのほか、ウェブ登録フォームによるインターネット申し込みも可能です。
(「下水道事業と地球温暖化防止」専攻を除く。)
- 7、研修開催場所は、日本下水道事業団研修センター(埼玉県戸田市)です。
(「下水道事業と地球温暖化防止」専攻は、全国町村議員会館(東京都千代田区)です。)

問合せ：日本下水道事業団 研修センター研修企画課 山田・保科

〒335-0037 埼玉県戸田市下笹目 5141

TEL048-421-2692 fax048-422-3326

■ 編集後記 ■

◆例年2月に発刊しております【J S 研修 みずのわ】を、今回は研修修了生6万人達成記念号として、J S 創立40周年と併せてこの時期に発刊いたしました。

◆40年を振り返りつつ、なるべく各時代・各専攻の研修生O Bの皆様やJ S 講師O Bの皆様、また、研修O B同窓会の方々等に、幅広く寄稿のお声がけをさせていただきました。

◆ご多忙の中、懐かしい思い出、研修への励まし等多くのご寄稿をいただき、大変ありがとうございます。深く御礼申し上げます。

◆大きく広がる研修生ネットワーク【みずのわ】は、下水道事業にたずさわる、また、たずさわってこられた皆様によって支えられてまいりました。本号に掲載できなかった数多くの研修O Bの皆様の声を、これからも皆様にお伝えしていきたいと思えます。担当の先生からのお声がけがありましたら、是非とも近況をご寄稿ください。

◆戸田の研修センターで、また各地方会場でお会いできる日を、J S 職員一同、楽しみにお待ちしております。

研修企画課長

遠田 和行